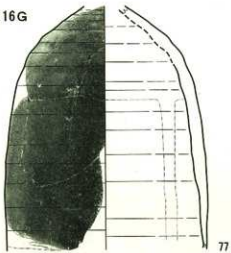
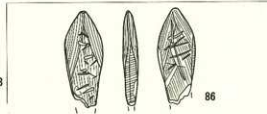
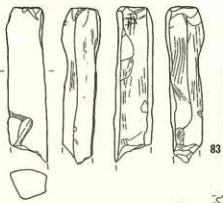
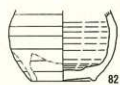
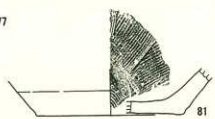
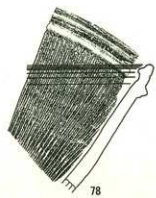


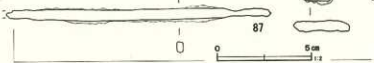
E16G



E17G

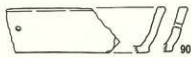


0 10cm 1:2

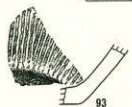


0 5cm 1:2

E18G



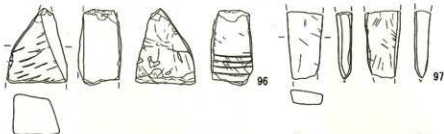
0 10cm 1:4



0 10cm 1:2

第278図 グリッド出土遺物 (5)

E18G

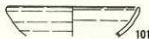
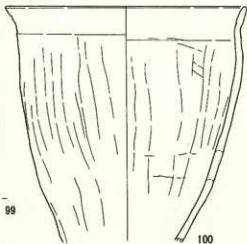


0 10cm
1.3



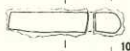
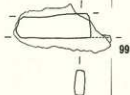
0 2.5cm
2.3

E19G



103

0 10cm
1.4

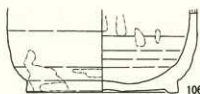


0 5cm
1.2



104

105



E20G



111



112



113

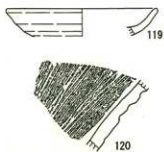


114

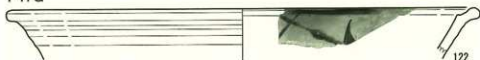
0 10cm
1.3

第279図 グリッド出土遺物(6)

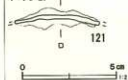
E 20G



F 17G



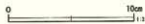
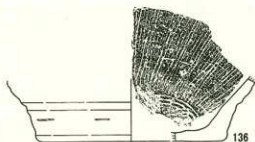
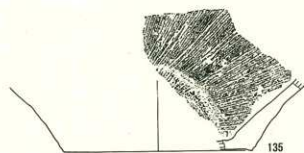
F 16G



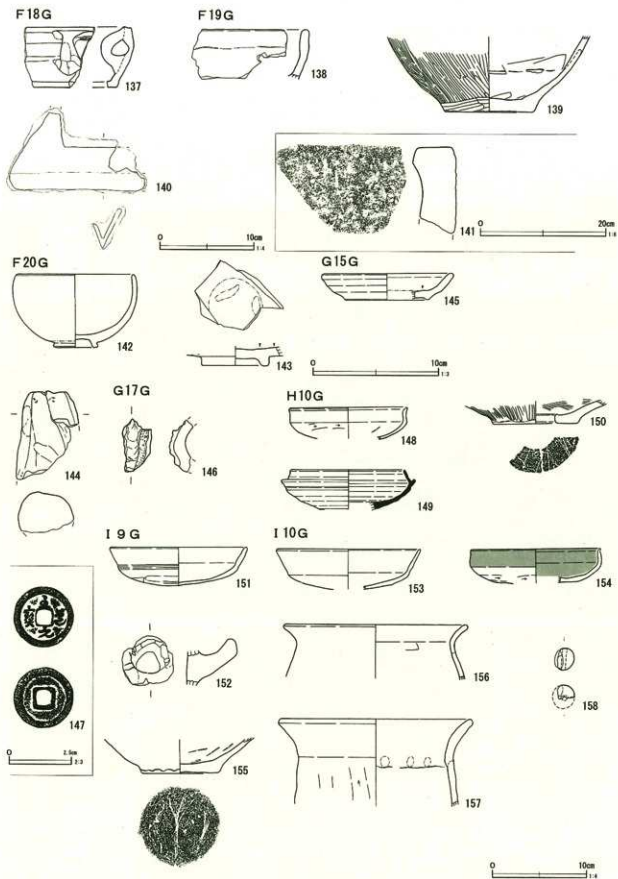
F 18G



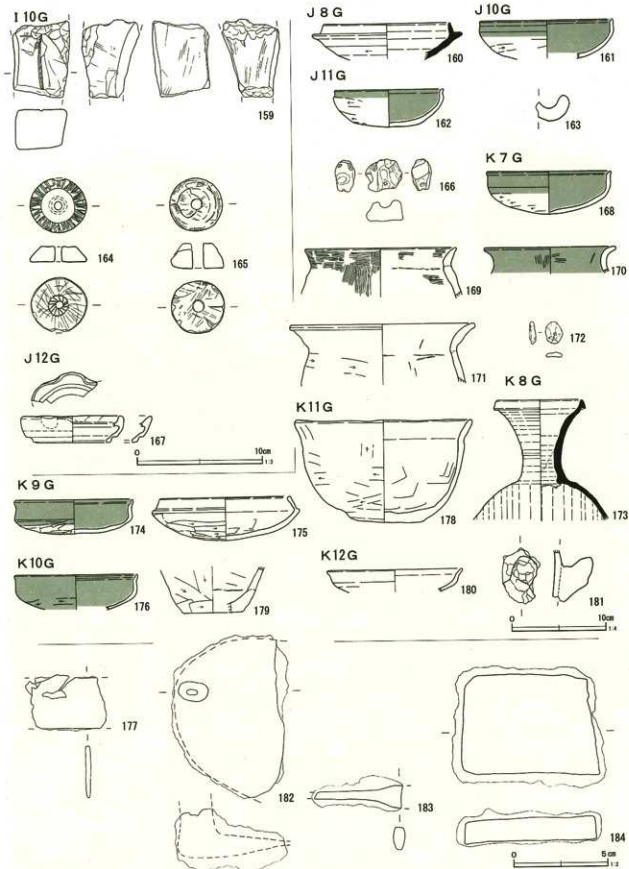
F 19G



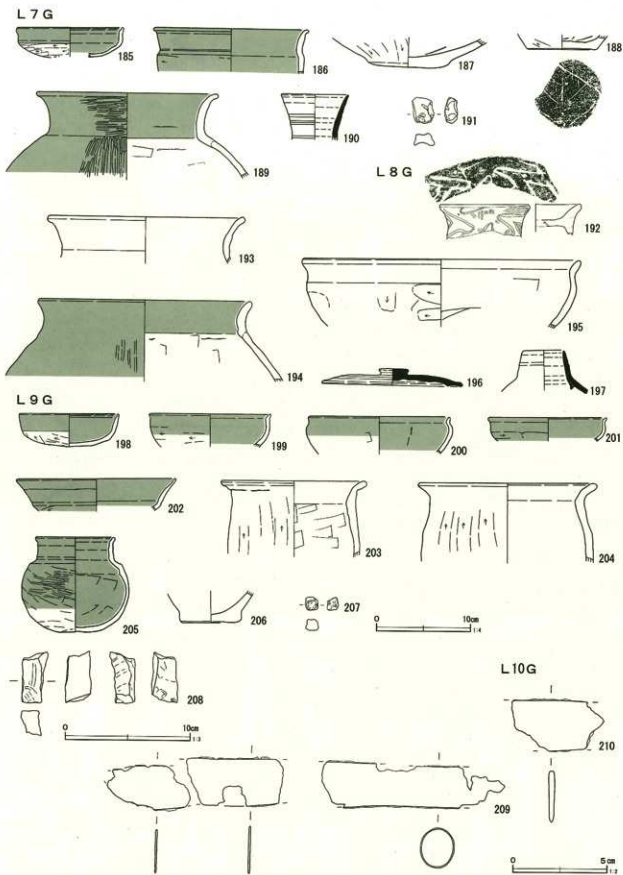
第280図 グリッド出土遺物 (7)



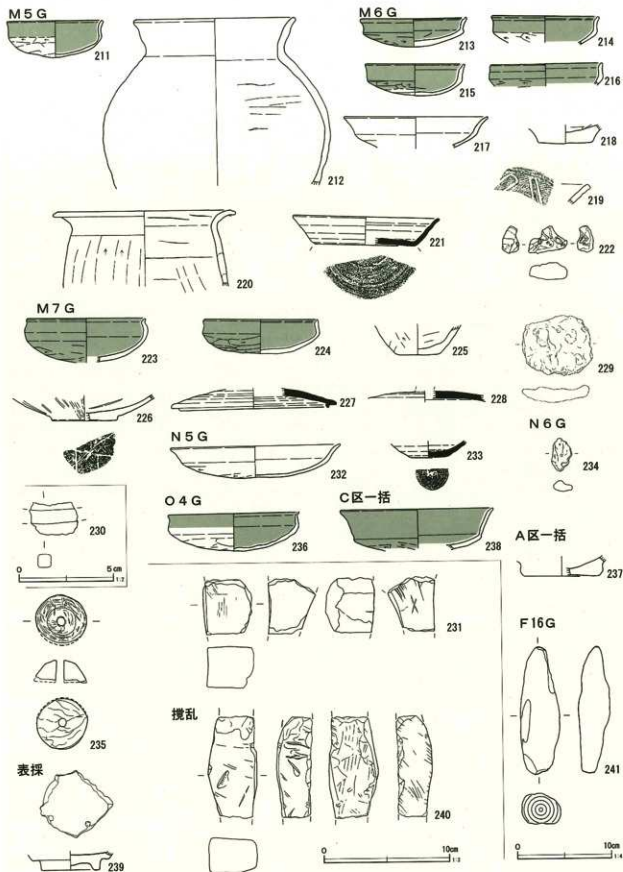
第281図 グリッド出土物(8)



第282図 グリッド出土遺物 (9)



第283図 グリッド出土遺物 (10)



第284図 グリッド出土遺物 (11)

第34表 グリッド出土遺物観察表

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	焼成	色調	成型技法	備考	
1	A-20G	A	土師器	台付甕	40		(8.8)	[7.4]	C F G K	やや不良	橙		内外面風化顕著	
2	A-21G	A	須恵器	甕	5			[1.6]	A C G	良好	灰	轆轤		
3	B-18G	A	陶器	罎鉢	10			[6.3]	A C D G	良好	灰白	轆轤	轆轤 即日9本/条 埴系か 18C中～後半	
4	B-20G	A	磁器	碗	30	(10.3)	(4.3)	5.1	E G	良好	灰白 緻密	轆轤	透明釉 呉須 外面雪輪樹文 高台内嵌(大明年製)三重内嵌 登付砂粒付着 肥前系 18C前～中葉 外面透明釉 内面鉄紫 高台内施釉 削出し高台 登付砂粒付着	
5	B-20G	A	青磁	碗	60		5.0	[1.8]	F	良好	灰白 緻密	轆轤	透明釉 呉須 雪輪樹文 肥前系 17C後半	
6	B-20G	A	磁器	碗	20	(11.0)		[4.2]	G	良好	灰白 緻密	轆轤	透明釉 呉須 呉人多 高台内施釉 外面松・竹・梅 削出し高台 京・伝承系 18C後半	
7	B-20G	A	磁器	小碗	65	(8.0)	2.5	3.9	G	良好	灰白	轆轤	透明釉 登付鉄紫 削出し高台 登付砂粒付着 肥前系 18C前半 くらわんか製	
8	B-20G	A	磁器	碗	15	(11.0)	(4.7)	5.8	A G	良好	灰白 緻密	轆轤	透明釉 鉄釉・白化質土 蓬草刷毛目 高台内施釉 削出し高台 肥前系 17C末～18C前半 鎌山手	
9	B-20G	A	陶器	碗	60		4.5	[3.0]	A	良好	にぶい 赤褐色	轆轤	透明釉 鉄釉・白化質土 蓬草刷毛目 高台内施釉 削出し高台 肥前系 17C末～18C前半	
10	B-20G	A	磁器	皿	50		(6.2)	[2.9]	G	良好	灰白 緻密	轆轤	透明釉 呉須 雪輪樹文 高台内(大明年製)削出し高台 見込み砂粒付着 肥前系 18C後半	
11	B-20G	A	磁器	碗	70		3.8	[3.2]	A G	良好	灰白	轆轤	透明釉 呉須 雪輪樹文 高台内(大明年製)削出し高台 見込み目録・鉄紫 肥前系 18C代	
12	B-20G	A	陶器	碗	80		4.2	[1.5]	G	良好	灰白	轆轤	内外面鉄釉・鉄釉掛け分け 高台内施釉 削出し高台 見込み砂粒付着 瀬戸・美濃系 18C後半	
13	B-20G	A	磁器	皿	15	(13.6)	(6.0)	3.4	G	良好	灰白 緻密	轆轤	透明釉 呉須 高台内施釉 見込み釉割き 口縁内・見込み二重内嵌 五弁花文 登付鉄紫・砂粒付着 肥前系 18C中～後半	
14	B-20G	A	陶器	罎鉢	15			[6.7]	C F G	普通	にぶい 黄褐色	轆轤	鉄釉 底部回転切り離し 即日9本/条 即日磨滅 瀬戸・美濃系 18C	
15	B-20G	A	石製品	砥石		長さ9.7cm 重さ80.8g	幅2.7cm	厚さ2.3cm					上下端部以外使用 使用度は比較的高い 鉄分・マンガン付着 産目か 瀬灰岩	
16	B-20G	A	石製品	砥石		長さ10.2cm 重さ89.2g	幅2.8cm	厚さ3.0cm					鉄分・マンガン付着 4面とも使用 使用度は比較的高い 瀬灰岩	
17	B-20G	A	石製品	砥石		長さ9.5cm 重さ139.5g	幅3.8cm	厚さ3.3cm					上下端欠損使用なし 他面は使用 使用度は比較的高い 瀬灰岩	
18	B-20G	A	鉄製品	不明		長さ6.7cm 重さ16.2g	幅0.4cm	厚さ0.4cm					鈔下け用具か	
19	B-21G	A	土師器	壺	45		5.7	[5.6]	A C D F G	普通	橙		IBSD52	
20	C-18G	A	青銅製品	銭		2.2cm×2.2cm×0.1cm		重さ1.3g					寛永通寶 錆化著しい	
21	C-17G	A	石製品	板碑		長さ28.2cm	幅13.7cm	厚さ2.9cm					P33 No.1 板石塔婆 区画清・天面の一部残存 種子 緑泥片岩	
22	C-19G	A	土師器	甕	10	(13.4)		[4.9]	A B D F G	普通	灰褐色		器面風化 内面ヘラナゲか	
23	C-19G	A	土師器	壺	90		9.5	[2.5]	A C D F G	普通	にぶい 橙		一折 内外面とも風化顕著	
24	C-19G	A	磁器	皿	50		5.3	[2.5]	A G	良好	灰白 緻密	轆轤	透明釉 呉須 草文か 高台内施釉 削出し高台 瀬戸・美濃系か 19C	
25	C-19G	A	磁器	碗	60		9.4	3.5	5.0	A G	良好	灰白 緻密	轆轤	透明釉 呉須 丸・高文 高台内施釉 登付鉄紫・ 砂粒付着 削出し高台 肥前系 18C中～後半
26	C-19G	A	鉄製品	不明		長さ7.1cm 重さ48.3g	幅1.0cm	厚さ0.5cm					錆化著しい 両端部欠損か	
27	C-20G	A	陶器	皿	35	(12.3)	4.6	3.7	A G	良好	灰 緻密	轆轤	外面透明釉 内面顔緑釉 見込み粘目釉割き・ 重痕・砂目 登付鉄紫 削出し高台 肥前系(内野山) 17C末～18C前半	
28	C-20G	A	陶器	皿	90	長径 13.0cm 径10.0	5.6	3.5	G	良好	灰白 緻密	型打	灰釉 費入多 貼付高台 瀬戸・美濃系 17C中葉	
29	C-20G	A	磁器	碗	40	(7.6)		[3.4]	G	良好	灰白	轆轤	透明釉 呉須 外面雲・鳥か 内面三重内嵌 肥前系 18C中～後半	
30	C-20G	A	陶器	甕罎	40		(5.2)	[2.2]	A F G	普通	にぶい 黄褐色	轆轤	鉄釉 底面無釉 底部回転切り離し 瀬戸・美濃系 18C後～19C中葉	
31	C-20G	A	陶器	壺	5			[4.9]	C G	良好	灰	轆轤	轆轤 自然釉 常滑系	
32	C-20G	A	土器	甕か	20		(9.4)	[3.8]	A C F G	良好	橙		轆轤	
33	C-20G	A	陶器	罎鉢	5			[5.7]	A C E	普通	明赤褐色	轆轤	轆轤 底部儀台跡付に有 即日12本/条→一俵筒系 18C中～後半	
34	C-20G	A	陶器	香炉か	25		(11.2)	6.1	A C D G	良好	明赤褐色	轆轤		
35	C-20G	A	石製品	砥石		長さ9.2cm 重さ62.5g	幅1.8cm	厚さ2.4cm					P27 欠口以外の4面使用 使用度は比較的高い 瀬灰岩	
36	C-20G	A	須恵器	坏	15	(12.8)		[2.4]	A C G H	普通	灰	轆轤		
37	C-20G	A	土器	埴輪	5			[5.0]	A B G	普通	黄灰	轆轤	外面煤付着	
38	C-20G	A	土器	かわらけ	30	(10.6)	(6.1)	2.0	A B D F G	普通	にぶい 橙	轆轤	底部回転切り離し	
39	C-20G	A	土製品	土人形		長さ3.4cm 重さ1.5g	幅0.8cm	厚さ0.6cm			にぶい 橙		手の部分か	

番号	道情	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	成型技法	備考
40	C-20G	A	貝塚穴 灰泥岩			長さ1.7cm 重さ1.4g	幅1.5cm	厚さ1.3cm			にぶい 橙		2孔 被熱による赤色化弱
41	C-20G	A	貝塚穴 灰泥岩			長さ1.4cm 重さ2.4g	幅1.4cm	厚さ1.4cm			にぶい 橙		2孔 被熱による赤色化弱
42	C-20G	A	石製品	板碑		長さ[16.5]cm	幅[10.6]cm	厚さ1.8cm					溝底 緑泥片岩 型二押形口
43	C-20G	A	石製品	板碑		長さ[6.7]cm	幅[5.7]cm	厚さ[0.9]cm					種子 緑泥片岩
44	C-21G	A	土器	かわらけ	10	(11.0)	(6.0)	2.0	F G	普通	にぶい 黄	轆轤	灯明皿に転用
45	C-21G	A	土器	かわらけ	40	(10.6)		[2.2]	B D G	普通	黄灰	轆轤	灯明皿に転用
46	C-21G	A	陶器	小坏	55	(8.2)	4.5	3.8	A G	良好	灰黄	轆轤	鉄輪 腰～高台内無輪 削出し高台 見込み目跡1・ 砂粒付着 瀬戸・美濃系 17C後半
47	D-16G	A	磁器	小碗	20	(3.2)	[2.4]		A	良好	灰白 緻密	轆轤	透明輪 貫入多 鉄粒(草文か) 削出し高台 見込 み目跡 費付砂粒付着 京・信楽系 18C後半か
48	D-16G	A	陶器	碗	25	(11.2)		[5.9]	G	良好	灰白 緻密	轆轤	外面銅緑輪・内面透明輪 貫入多 見込み砂粒付着 肥前系(内野山) 17C後半～18C前半
49	D-16G	A	陶器	皿	80	12.1	5.9	2.4	C D G	良好	灰白	轆轤	P2 No1 灰輪 貫入多 底面回転糸切り跡し 見込み～口縁部付着 灯明皿に転用か、二次的被熱 黒色化 瀬戸・美濃系か 15C末～16C前半か
50	D-16G	A	陶器	皿	5	(15.0)		[2.2]	A F G	良好	にぶい 橙	轆轤	灰輪 瀬戸・美濃系 17C末～18C中葉
51	D-16G	A	陶器	碗	50	(4.0)	[3.2]		A	普通	茶褐	轆轤	表透 透明輪 灰輪 白化焼土 費付無輪 削出し 高台 見込み砂粒付着 肥前系 17C末～18C前半
52	D-16G	A	陶器	楕鉢	5			[4.8]	C D J	良好	浅黄	輪轆か	焼締 脚目8本/条 丹波系 18C前半か
53	D-16G	A	鉄製品	不明		長さ[5.0]cm 重さ20.0g	幅3.6cm	厚さ1.0cm					刀子または鎌か 錆化著しい
54	D-17G	A	磁器	碗	15	(10.3)	(5.0)	2.5	A	普通	灰白	轆轤	透明輪 須須 貫入多 高台内無輪・一重面跡 削出し高台 費付砂粒付着 瀬戸・美濃系 19C前半
55	D-17G	A	土師器	台付盃	70		12.2	[7.4]	A C E	普通	明赤褐		器面風化顯著
56	D-19G	A	土師器	盃	95		11.0	[2.1]	A E F	普通	黄灰		P23 底部木炭灰
57	D-20G	A	磁器	碗	55	(9.8)	4.0	5.3	G	良好	灰白	轆轤	透明輪 須須 外面二重割目文 内面一重割目文 見込み二重割目文・菊花文 高台内無輪か 費付無輪 削出し高台 肥前系 18C後半
58	D-20G	A	磁器	碗	20	(10.0)	(4.0)	5.2	G	良好	灰白 緻密	轆轤	透明輪 菊花文 外面一重面跡 削出し高台 費付砂粒付着 肥前系 18C後半 くらゐんか
59	D-20G	A	磁器	皿	30	(12.8)	(7.5)	2.8	G	良好	灰白	轆轤	透明輪 須須 瀬戸・美濃系 19C中～後半
60	D-20G	A	陶器	碗	30	(3.2)	[4.2]		E G	良好	灰白	轆轤	透明輪 貫入多 削出し高台 京・信楽系 19C前半 小形碗
61	D-20G	A	陶器	皿	30	(10.0)	(5.4)	2.7	A C G	普通	灰白	轆轤	灰輪 削出し高台 見込み内縁ピッチ1 二次的被熱 瀬戸・美濃系 18C後半か
62	D-20G	A	陶器	碗	20	(12.2)		[4.6]	G	良好	灰黄褐	轆轤	透明輪・鉄輪 白化焼土 刷毛目 見込み目跡 肥前系 17C末～18C前半 鎌手
63	D-20G	A	陶器	鉢	5	(22.2)		[6.3]	A G	良好	灰白	轆轤	灰輪 瀬戸・美濃系 18C後半
64	D-20G	A	陶器	鉢	20			[9.3]	A C F J	良好	灰褐	轆轤	焼締 脚目9本/条か 埋系か 18C中～後半
65	D-20G	A	陶器	楕鉢	10			[2.9]	A C J	良好	灰褐	輪轆か	焼締 底面・見込み焼白跡 埋系 18C中～後半
66	D-20G	A	陶器	楕鉢	20	(36.4)	(12.4)	12.0	A C D E F J	普通	にぶい 橙	輪轆	焼締 脚目6本/条 脚目の磨耗少 丹波系 17C後半
67	E-14G	A	陶器	灯明皿	25	10.0	4.2	2.1	A E	良好	にぶい 黄橙	轆轤	鉄輪 見込み重轆締 瀬戸・美濃系 18C後～19C中葉
68	E-14G	A	石製品	砥石		長さ[4.1]cm 重さ45.8g	幅3.7cm	厚さ2.1cm					2面使用 使用面滑らか 凝灰岩
69	E-16G	A	土師器	盃	5	(16.8)		[1.9]	A C D F G	普通	橙		器面風化顯著
70	E-16G	A	土師器	盃	25	(16.4)		[9.5]	A B C D F G	普通	橙		器面風化顯著
71	E-16G	A	軟質 陶器	平瓦	5	長さ[8.9]cm 厚さ1.7cm	幅[11.5]cm	重さ174.4g	A C F G	普通	にぶい 黄		
72	E-16G	A	陶器	小坏	30	(4.2)	[3.3]		A	良好	灰白	轆轤	灰輪 貫入多 削出し高台 瀬戸・美濃系 18C後半
73	E-16G	A	陶器	灯明皿	20	(10.2)	(5.0)	1.7	A G	良好	茶褐	轆轤	P143 鉄輪 瀬戸・美濃系か 18C後～19C中葉
74	E-16G	A	陶器	皿	30	(4.2)	[2.3]		F G	良好	灰黄 緻密	轆轤	外面透明輪 内面銅緑輪(貫入多) 削出し高台 見込み蛇目割き・砂目跡 費付砂粒付着 肥前系(内野山) 17C末～18C前半
75	E-16G	A	陶器	皿	40	4.8	[1.9]	G	良好	灰黄	轆轤	灰輪 貫入多 見込み割目山水文 削出し高台 高 台内陰割[6]字状 肥前系 17C後半 京焼風陶器	
76	E-16G	A	土器	盃	55	8.0	8.0	2.1	A D G	普通	橙		焼塩釜の蓋 蓋裏布目痕
77	E-16G	A	陶器	徳利	30			[19.3]	A	良好	灰	轆轤	外面・内面上部鉄輪 瀬戸・美濃系 18C後～19C中葉
78	E-16G	A	陶器	楕鉢	5			[10.1]	A D G	良好	明赤褐	輪轆か	焼締 外面保付者 二次的被熱 脚目11本/条 埋系か 18C中～後半
79	E-17G	A	陶器	碗	20	(11.8)		[2.9]	A	良好	灰褐	轆轤	鉄輪 瀬戸・美濃系 17C中葉 天日碗

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率(%)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	焼成	色調	成型技法	備考
80	E-17G	A	陶器	皿	30		(7.0)	[2.4]	A	普通	灰	轆轤	内面長石釉・鉄絵 蘭竹文 貼付け高台 見込み輪トナ跡か 二次的被熱 志野窯部 17C前半 折縁皿
81	E-17G	A	陶器	蓋鉢	20		(11.8)	[3.6]	A C G	良好	灰褐	轆轤	鉄輪 即日9本/条
82	E-17G	A	陶器	壺	80		5.1	[5.6]	A F G	普通	灰白	轆轤	鉄輪 削出し高台 瀬戸・美濃系 17C前半
83	E-17G	A	石製品	砥石		長さ12.2cm 重さ128.5g	幅3.0cm	厚さ2.9cm					P1 上下端面以外使用(一面のみ使用度高) 庫目か 凝灰岩
84	E-17G	A	土師器	壺	20		(8.0)	[3.2]	A B D F G	普通	浅黄橙	P73	器面風化顯著
85	E-17G	A	土師器	壺	70		6.2	[3.1]	A C D F G	普通	灰黄褐	一括	器面風化顯著 調整不明
86	E-17G	A	石製品	右製 標造品		長さ5.7cm 重さ9.7g	幅2.0cm	厚さ0.8cm					P1 欠損し傷多い ガジリあり 滑石製
87	E-17G	A	鉄製品	不明		長さ14.0cm 重さ16.6g	幅0.6cm	厚さ0.4cm					錆化著しい
88	E-17G	A	鉄製品	鎌か		長さ3.5cm 重さ13.2g	幅[3.7]cm	厚さ0.7cm					錆化著しい
89	E-18G	A	土器	かわかけ	35	(11.0)		2.9	D F G	普通	にぶい 黄橙	轆轤	P129 底部静止系切り後へう割りか 油埋付着 灯明皿に転用
90	E-18G	A	土器	焙烙	10			4.7	A G	普通	灰黄	轆轤	1孔現 補修孔か
91	E-18G	A	陶器	鉢鉢	20	(28.4)		[12.8]	A C G	良好	灰白	轆轤	鉄輪・銅線流し掛け 瀬戸・美濃系 18C後葉
92	E-18G	A	陶器	有耳 壺か	40		(7.0)	[3.6]	A C F	良好	橙	轆轤	内面鉄輪 底部回転系切り難し・砂粒付着 瀬戸・美濃系 19C代か
93	E-18G	A	陶器	鉢鉢	5			[4.5]	C D J	良好	赤褐	轆轤	焼締 即日9本/条 埴系か 18C代
94	E-18G	A	陶器	蓋鉢	5			[2.9]	G	良好	灰白	轆轤	P90 鉄輪 即日6本/条 瀬戸・美濃系 17C後半
95	E-18G	A	陶器	蓋鉢	5			[6.9]	A C G	良好	明赤褐	轆轤	焼締 即日8本/条 埴系か 18C中～後半
96	E-18G	A	石製品	砥石		長さ16.0cm 重さ109.9g	幅4.7cm	厚さ2.8cm					P115 欠口以外の4面使用 使用度高 凝灰岩
97	E-18G	A	石製品	砥石		長さ5.3cm 重さ27.2g	幅2.5cm	厚さ1.1cm					P41 両端面以外の4面使用(使用度は比較的高) 凝灰岩
98	E-18G	A	青銅 製品	銭			2.4cm×2.4cm×0.1cm	重さ2.4g					寛水通貫
99	E-18G	A	鉄製品	刀子か		長さ5.1cm 重さ20.7g	幅2.4cm	厚さ0.5cm					錆化著しい 両端面欠損
100	E-19G	A	土師器	甌	90	25.8		[24.8]	A C D F G	にぶい 黄橙			P3 №2 外面黒煤
101	E-19G	A	土器	かわかけ	20	(14.0)		[3.1]	B C G J	不良	赤灰		二次的被熱 赤色化
102	E-19G	A	須恵器	甕か	20		(16.8)	[3.8]	A C G H	良好	灰	轆轤	貼付け高台
103	E-19G	A	土製品	土玉	100	径2.9×2.3cm 高さ1.9cm 孔径0.7～0.6cm 重さ11.1g			B C F G	普通	にぶい 黄橙		P3 №1
104	E-19G	A	陶器	碗	5			[3.1]	A	普通	灰白	轆轤	鉄輪 瀬戸・美濃系 17C後半か 天目碗
105	E-19G	A	磁器	碗	35		(4.0)	[2.8]	G	良好	灰白 緻密	轆轤	透明釉 呉須 高台内輪輪・瀬戸大明骨製し・直園 線 高台際・重園線 削出し高台 肥前系 18C代
106	E-19G	A	陶器	有耳 壺か	25		(12.0)	[6.6]	A E G	良好	灰白 緻密	轆轤	粘輪か 費付一部輪付着 削出し高台 高台輪重積痕 瀬戸・美濃系 18C前半
107	E-19G	A	陶器	蓋鉢	5			[5.1]	F G	普通	にぶい 黄橙	轆轤	鉄輪 底部輪輪 回転系切り難し 見込み玉子トナ跡 即日滑焼 瀬戸・美濃系
108	E-19G	A	鉄製品	刀子か		長さ4.2cm 重さ5.8g	幅1.1cm	厚さ0.1～0.2cm					錆化著しい
109	E-19G	A	石製品	砥石		長さ19.0cm 重さ121.0g	幅3.3cm	厚さ4.0cm					下部面以外の4面使用 側面は使用度高 凝灰岩
110	E-20G	A	磁器	碗	75	9.6	4.5	5.5	G	良好	明青灰 緻密	轆轤	透明釉 呉須 青輪樹文 削出し高台 高台内に銘 肥前系 18C後半 くらわんか碗
111	E-20G	A	磁器	碗	75		4.1	[3.0]	G	良好	灰白 緻密	轆轤	透明釉 呉須 貫入多 費付無輪・砂粒付着 外面 草花文か、一・二重園線 削出し高台 高台内に銘 見込みトナ跡1 肥前系 18C後半 くらわんか碗
112	E-20G	A	磁器	碗	30	(10.0)	4.0	4.7	G	良好	明青灰 緻密	轆轤	透明釉 雲輪樹文 高台際・二重園線 削出し高台 見込み・費付砂粒付着 肥前系 18C前半
113	E-20G	A	磁器	碗	75		3.9	[2.4]	G	良好	白 緻密	轆轤	透明釉 外面・高台輪・見込み 二重園線 高台 費文 削出し高台 費付砂粒付着 肥前系か 19C前半
114	E-20G	A	磁器	小杯	50	(7.0)	2.5	3.3	G	良好	灰白 緻密	轆轤	透明釉 呉須 笹文 削出し高台 肥前系 18C
115	E-20G	A	磁器	碗	40	(7.1)	3.8	5.3	G	良好	灰白	轆轤	透明釉 呉須 外面竹 高台輪・内面口縁・見込み二 重園線 五弁花文 削出し高台 高台内砂粒付着 肥前系 18C後葉 簡型碗
116	E-20G	A	磁器	碗	90	8.0	3.4	5.4	G	良好	灰白 緻密	轆轤	透明釉 呉須 見込み五弁花文 削出し高台 費付 砂粒付着 肥前系 18C後葉～19C前半 簡型碗
117	E-20G	A	陶器	皿	10	(16.8)		[3.0]	A G	良好	灰黄	轆轤	鉄輪 漆黒輪流し掛け 見込み蛇行輪跡 高台輪輪トナ跡 瀬戸・美濃系 17C末～18C中葉
118	E-20G	A	陶器	灯明皿	50	(10.8)	4.5	1.7	A G	良好	灰 緻密	轆轤	鉄輪 見込み輪トナ跡 底部回転へう割り 瀬戸・美濃系 18C後～19C前半
119	E-20G	A	陶器	皿	5	(11.8)		[2.2]	F G	良好	灰白	轆轤	長石釉 貫入多 瀬戸・美濃系 志野 16C末～17C初葉

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	成型技法	備考
120	E-20G	A	陶器	鉢鉢	5				A C G	良好	灰	轆轤か	焼跡 跡目8本/条 丹波系か 18C代か
121	F-16G	A	鉄製品	和釘か		長さ4.5cm 重さ3.2g	幅0.3cm	厚さ0.2cm					錆化著しい 両端部欠損
122	F-17G	A	陶器	鉢	10	(37.8)		[3.8]	G	良好	浅黄橙	轆轤	一括 灰釉 外面銅緑釉・鉄粉流し掛け 貫入多 瀬戸・美濃系 17C後半
123	F-17G	A	陶器	鉢鉢	5			[5.0]	A C F G	良好	灰白	轆轤	P48 鉄釉 見込み・底部トチ跡 跡目13本/条 瀬戸・美濃系 18C代か
124	F-17G	A	青銅 製品	銭		2.5cm×2.5cm×0.1cm		重さ2.2g					P3 No1 摩滅著しく文字不明
125	F-18G	A	磁器	皿	20	(24.4)		[2.5]	G	良好	白 磁密	轆轤 型打	透明釉 鉄須 貫入多 外面口縁一重面施 腰部草花文 内面一重面施・草花文 肥前系 17C末～18C前半 輪花皿
126	F-19G	A	陶器	銅鑲口 か	45	4.6	3.3	1.7	A G	良好	白		灰釉 口内面・底部外面無釉 底部回転へう削り 瀬戸・美濃系 18C代か
127	F-19G	A	陶器	銅鑲口 か	70		3.4	[1.6]	A F G	良好	灰白		灰釉 貫入多 底部無釉・回転系切り履し 瀬戸・美濃系 19C前半
128	F-19G	A	磁器	皿	20	(4.0)		[1.5]	A G	良好	灰白	型打	灰釉 肥前系 18C代か 紅黒
129	F-19G	A	磁器	小皿	70		2.4	[2.9]	G	良好	白	轆轤 型打	白磁釉 覆付・高台内無釉 削出し高台 漆黒さか 肥前系 17C後半
130	F-19G	A	磁器	碗	25	(8.4)	(3.4)	5.1	A G	良好	灰白	轆轤	透明釉 鉄須 貫入多 高台内縁製 削出し高台 覆付砂粒付青 瀬戸・美濃系 19C前～中 黒反腹
131	F-19G	A	磁器	碗	50		4.2	[2.4]	G	良好	灰白 磁密	轆轤	透明釉 鉄須 覆付無釉 外面二重面日文 内面一重面日文 見込み菊花文 高台内縁製 削出し高台 肥前系 18C前半
132	F-19G	A	陶器	皿	20	(4.7)	[1.8]		G	良好	灰白	轆轤	透明釉 貫入多 高台内縁削 見込み椀山木文・ トチ跡か 削出し高台 肥前系 17C後半 京焼風陶器
133	F-19G	A	陶器	碗	60		5.5	[3.7]	F G	普通	灰白 磁密	轆轤	灰釉 貫入多 貼付け高台 見込み円蓮ヒン跡か 貫入内にある茶色は茶流さか 瀬戸・美濃系 18C代か
134	F-19G	A	陶器	碗	20	(12.0)		[3.4]	F G	良好	灰白	轆轤	灰釉 刷毛塗りか 瀬戸・美濃系 17C末～18C中葉
135	F-19G	A	陶器	鉢鉢	20		(15.0)	[5.5]	A F G	良好	にぶい 赤褐	轆轤	焼跡 丹波系 18Cか
136	F-19G	A	陶器	鉢鉢	10		(15.0)	[4.8]	A C G J	良好	灰黄	轆轤	焼跡 跡目7本/条 跡目磨滅 信楽系か 18Cか
137	F-18G	A	土器	焙烙	5			6.4	A C F G	普通	褐灰		外面煤付着
138	F-19G	A	土器	焙烙	10			[5.2]	A G	普通	灰白		外面煤付着
139	F-19G	A	土師器	壺	70			9.6	[8.1]	A B D E F G	良好	明赤褐	外面赤彩
140	F-19G	A	鉄製品	不明		長さ9.0cm 重さ350.5g	幅14.9cm	厚さ4.0cm					磨先か
141	F-19G	A	石製品	石鉢				[13.6]					厚さ[5.5]cm 安山岩
142	F-20G	A	陶器	鉢	35	(9.4)	3.6	5.8	A F G	良好	灰黄	轆轤	透明釉 覆付・高台内無釉 削出し高台 見込み四方彫り埋少 京・信楽系か 18C後半
143	F-20G	A	陶器	皿	75		5.4	[1.4]	F G	良好	灰白 磁密	轆轤	灰釉 覆付・高台内無釉 削出し高台 見込み輪目 輪割ぎ・トチ跡3 瀬戸・美濃系 17C末～18C前半
144	F-20G	A	土製品	支脚		長さ8.5cm 厚さ4.1cm	幅5.9cm		F	普通	にぶい 黄橙		全面ナデ
145	G-15G	A	陶器	皿	15	(10.4)	(6.5)	2.1	A G	良好	灰白	轆轤	灰釉 見込み輪目刺ぎ 削出し高台 瀬戸・美濃系 17C中葉
146	G-17G	A	土製品	羽口		長さ5.5cm	幅3.1cm	重さ21.3g			赤褐		気泡多 赤色化著しい
147	G-17G	A	青銅 製品	銭		2.4cm×2.4cm×0.05cm		重さ2.6g					□元字 錆化若下
148	H-10G	C	土師器	環	35	(12.5)		[3.3]	A B C F G	普通	明赤褐		外面熱のため煤が全体的に付着 器面剥離顕著
149	H-10G	C	須恵器	環	20	(12.1)		[4.1]	A C G	普通	灰	轆轤	回転へう削り
150	H-10G	C	土師器	壺	25		(9.2)	[2.4]	A C D F G	普通	にぶい 橙		焼成前穿孔 孔径(4.0)cm 器面風化 底部木葉痕
151	I-9G	C	土師器	環	95	14.7		4.0	A C D F G	普通	にぶい 褐		P4 No1
152	I-9G	C	土師器	皿	70	長さ4.9cm 厚さ1.6cm	幅5.4cm		A B D F G	普通	にぶい 黄橙		把手部分
153	I-10G	C	土師器	環	25	(15.2)		[4.2]	A D G	普通	にぶい 黄橙		器面風化顕著 調整痕はみえない
154	I-10G	C	土師器	環	60	(13.8)		[3.5]	A C F G H	良好	にぶい 赤褐		赤彩
155	I-10G	C	土師器	壺	70		8.0	[3.7]	A D F G H	良好	にぶい 橙		底部木葉痕
156	I-10G	C	土師器	壺	20	(19.4)		[5.7]	A B C D E I	普通			器面風化顕著
157	I-10G	C	土師器	壺	20	(20.5)		[9.2]	A B C D E F G K	普通	にぶい 褐		器面風化顕著
158	I-10G	C	土製品	土玉	25	長さ2.3cm 孔径(0.4)cm	径(1.8)cm	厚さ1.5cm					黒褐
159	I-10G	C	石製品	砥石		長さ(6.1)cm 重さ143.0g	幅4.5cm	厚さ4.5cm					両端部以外の4面使用(使用度高) 凝灰岩

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	成型技法	備考
160	J-8G	C	須恵器	坏	20	13.2		[3.8]	A C G	やや不良	灰	轆轤	P18 回転へう割り
161	J-10G	C	土師器	坏	25	(14.2)		[4.1]	A B C G	普通	橙		P3 赤彩
162	J-11G	C	土師器	坏	70	(11.5)		4.0	A C F G	普通	橙		赤彩 外面ほぼ全面黒斑 赤彩の範囲は不詳明
163	J-11G	C	土師器	瓶	60	長さ3.7cm 厚さ1.4cm	幅2.1cm		B C D G	普通	にぶい 黄緑		P24 把手部分
164	J-11G	C	石製品	紡錘車	95	広径4.5cm 孔径0.6cm	狭径2.8cm 重さ31.7g				オリ ン黒		縦溝内一括 器面滑らか 滑石製
165	J-11G	C	石製品	紡錘車	70	広径4.2cm 孔径0.8cm	狭径2.5cm 重さ47.3g				乳白		P9 滑石製
166	J-11G	C	貝塚穴 灰泥岩			長さ3.1cm 重さ16.3g	幅3.8cm	厚さ2.1cm			淡赤橙		縦溝内 12孔 焼熱により赤色化
167	J-12G	C	陶器	皿	20	(8.5)	(6.0)	2.1	F G	良好	灰白	轆轤 型打ち	灰輪 瀬戸・美濃系か 19C代か
168	K-7G	C	土師器	坏	40	(13.2)		4.5	A B D F G	良好	にぶい 黄橙		P19 赤彩
169	K-7G	C	土師器	甕	40	(16.0)		[5.3]	A G	普通	灰黄		No1 器面風化
170	K-7G	C	土師器	豆	15	(14.1)		[2.9]	C F J	普通	橙		赤彩 器面風化顕著
171	K-7G	C	土師器	甕	20	(19.4)		[6.5]	A C F	普通	にぶい 黄橙		No2 外面に黒斑
172	K-7G	C	貝塚穴 灰泥岩			長さ2.3cm 重さ1.4g	幅1.8cm	厚さ0.5cm			にぶい 灰白		P20 5孔 焼熱のため赤色化
173	K-8G	C	須恵器	瓶	70	8.9		[12.5]	A G	良好	灰白	轆轤	P6 フラスコ型 自然輪
174	K-9G	C	土師器	坏	95	12.5		3.6	A B C D G	普通	橙		P4 赤彩
175	K-9G	C	土師器	坏	100	13.8		4.5	A B D F G	普通	にぶい 赤褐		P4 No1
176	K-10G	C	土師器	坏	20	(13.0)		[3.7]	C E F G J	良好	明赤褐		P8 全面赤彩か
177	K-10G	C	鉄製品	鎌か		長さ4.3cm 重さ10.2g	幅2.8cm	厚さ0.3cm					錆化著しい
178	K-11G	C	土師器	鉢	80	18.7	8.0	10.7	A B C D E F J	普通	にぶい 黄橙		P11 No1 外面に黒斑
179	K-11G	C	土師器	甕	20	(6.2)	[5.0]	[5.0]	F G	良好	灰黄		P44
180	K-12G	C	土師器	坏	15	(14.3)		[2.4]	C D F G	普通	橙		器面風化顕著
181	K-12G	C	土師器	瓶	65	長さ4.8cm 厚さ2.4cm	幅4.2cm		A C D F	普通	にぶい 赤褐		P1 把手部分
182	K-12G	C	鉄製品	鎌か		長さ[8.3] 重さ117.0g	幅[5.6]cm	厚さ[2.5]cm					錆化著しい
183	K-12G	C	鉄製品	刀子か		長さ[4.8] 重さ9.1g	幅1.2cm	厚さ0.6cm					刃部欠損 錆化著しい
184	K-12G	C	鉄製品	不明		長さ6.1cm 重さ245.5g	幅8.2cm	厚さ1.8cm					錆化著しい
185	L-7G	C	土師器	坏	25	(11.4)		[3.2]	G	良好	にぶい 赤褐		赤彩
186	L-7G	C	土師器	鉢か	15	(16.4)		[4.6]	C F J	良好	橙		内外面とも赤彩か
187	L-7G	C	土師器	甕	30	(8.6)	[3.2]	[3.2]	A B C F G	普通	にぶい 橙		器面風化顕著
188	L-7G	C	土師器	甕	70	7.4	[1.6]	[1.6]	A B C F	普通	橙		焼熱により赤色化 底部木葉痕
189	L-7G	C	土師器	甕	10	(19.2)		[8.7]	A B C D F G	普通	橙		赤彩
190	L-7G	C	須恵器	甕か	25	(7.0)		[4.8]	A G	普通	灰	轆轤	
191	L-7G	C	貝塚穴 灰泥岩			長さ2.8cm 重さ6.5g	幅2.3cm	厚さ1.3cm			にぶい 橙		7孔 焼熱により赤色化
192	L-8G	C	弥生 土器	盃形 土器	40	(9.6)		[3.6]	A D F J	普通	褐灰		表面に浅線による不整形なモチーフ(ヒトテ状文)を 描く 内部にモチーフの方向に合わせ無銘縄文土を 充填施文
193	L-8G	C	土師器	甕	20	(21.0)		[5.0]	A C D G	普通	明赤褐		器面風化顕著
194	L-8G	C	土師器	壺	15	(22.7)		[8.5]	A B D F	普通	明赤褐		赤彩 器面風化顕著
195	L-8G	C	土師器	鉢か	15	(29.4)		[7.2]	B C F G	普通	にぶい 橙		
196	L-8G	C	須恵器	蓋	30	(15.0)		1.7	A C F G	普通	褐灰	轆轤	回転へう割り
197	L-8G	C	須恵器	短頸瓶	35	(4.2)		[4.3]	A G	良好	褐灰	轆轤	自然輪付着
198	L-9G	C	土師器	坏	25	(10.6)		4.5	A D F G	普通	赤褐		表層 赤彩
199	L-9G	C	土師器	瓿	20	(13.0)		[3.6]	C E F J	普通	橙		P3 全面赤彩 外面黒斑のため赤彩の範囲が不明確 器面風化顕著
200	L-9G	C	土師器	坏	20	(15.1)		[3.9]	C F J	良好	明赤褐		P5 赤彩

番号	遺構	区別	種別	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	成型技法	備考
201	L-9G	C	土師器	環	25	(12.6)		[2.5]	A C F G	普通	明赤褐		P52 全面赤彩
202	L-9G	C	土師器	高環	20	(16.9)		[3.4]	A B C D F G	普通	赤褐		表採 全面赤彩
203	L-9G	C	土師器	甕	25	(15.0)		[8.0]	A B C F G	良好	明赤褐		P32 角閃石多
204	L-9G	C	土師器	甕	20	(19.0)		[8.3]	A B C F G	普通	にぶい赤褐		P73 内面風化顕著
205	L-9G	C	土師器	小型壺	55	(8.4)		10.0	B C F G	普通	橙		表採 赤彩
206	L-9G	C	土師器	壺	90		6.6	[3.3]	B C D F	普通	明赤褐		内外両面風化顕著
207	L-9G	C	貝塚穴痕泥岩										6孔 被熱による赤色化弱
208	L-9G	C	鉄製品	砥石									2面使用 使用度は比較的高 凝灰岩
209	L-9G	C	鉄製品	鎌か									錆化著しい
210	L-10G	C	鉄製品	鎌か									両端部欠損 錆化著しい
211	M-5G	C	土師器	環	60	(10.0)		3.9	B C F G	普通	明赤褐		P26 赤彩
212	M-5G	C	土師器	甕	60	(17.2)		[17.7]	A C K	普通	にぶい橙		P1 器面風化 調整痕みえず
213	M-6G	C	土師器	環	30	(11.2)		3.0	A C F	良好	明赤褐		全面赤彩か
214	M-6G	C	土師器	環	20	(11.4)		[2.9]	A C G	普通	橙		P22 赤彩
215	M-6G	C	土師器	環	70	10.4		3.4	A B C G K	良好	橙		P40 全面赤彩 底部磨滅のため赤彩の有無不明
216	M-6G	C	土師器	環	20	(11.6)		[2.3]	E F J	普通	橙		P3 全面赤彩
217	M-6G	C	土師器	環	30	(15.3)		[3.2]	A F G	普通	黄灰		器面風化顕著
218	M-6G	C	土師器	壺か	70		5.8	[2.0]	B C F J	普通	橙		外面風化顕著
219	M-6G	C	弥生土器	浅鉢	5			[2.1]	A B F J	普通	にぶい褐		P45 表面に無節縄文を横方向に施す その後次第で舌状や長方形のモチーフを描きモチーフ内の縄文を磨り消す
220	M-6G	C	土師器	甕	25	(19.4)		[8.1]	A B C D F G	普通	赤褐		P3 外面煤付着
221	M-6G	C	須恵器	環	40	(15.8)	(10.7)	3.0	A C G	良好	灰	轆轤	回転へう割り
222	M-6G	C	貝塚穴痕泥岩										8孔 濃い被熱のため赤色化(ボロボロ)
223	M-7G	C	土師器	環	20	(12.6)		[4.7]	G	良好	橙		全面赤彩
224	M-7G	C	土師器	環	90	12.2		3.6	A C F G	普通	赤		P1 No1 全面赤彩
225	M-7G	C	土師器	甕	50		4.6	[3.0]	A F G	普通	にぶい橙		外面へう割り
226	M-7G	C	土師器	壺	30		(7.0)	[2.7]	A B F	普通	明赤褐		底縁木炭痕
227	M-7G	C	須恵器	蓋	20	(16.7)		[2.1]	A C E G	良好	灰	轆轤	回転へう割り
228	M-7G	C	須恵器	蓋	20			[1.2]	A C F G	普通	灰褐	轆轤	回転へう割り
229	M-7G	C	鉄製品	不明									磨り削治淨か
230	M-7G	C	鉄製品	和釘か									P40 錆化著しい
231	M-7G	C	石製品	砥石									3面使用 使用度は比較的高 凝灰岩
232	N-5G	C	土師器	環	20	(18.2)		3.3	A G	普通	橙		P27 器面風化顕著
233	N-5G	C	須恵器	環	30		3.0	[1.7]	G	良好	灰	轆轤	底部回転へう割り
234	N-6G	C	貝塚穴痕泥岩										7孔 被熱なしか
235	N-6G	C	石製品	紡錘車	90								P33 横方向の擦痕多、縦方向に少 滑石製
236	O-4G	C	土師器	環	60	(14.0)		3.8	A D C	良好	にぶい赤褐		P10 Na1 赤彩
237	AK区一基	A	土師器	壺	20		(8.0)	[2.1]	A B C D F G J	普通	橙		旧SK89 器面風化顕著
238	CK区一基	A	土師器	環	25	(16.3)		[4.3]	A C F G	普通	赤		赤彩
239	表採	一	陶器	皿か	90		4.6	[1.9]	G	良好	灰黄	轆轤	鉄輪 覆付～高台内無輪 掘出し高台 貝込み土子跡 掘付・美濃系 18C磁土か
240	西側掘戻	A	石製品	砥石									両端部以外の4面使用(使用度は比較的高) 凝灰岩
241	F-16G	A	木製品	片割切斷									P6 芯持丸木

14. 自然科学分析

第6号方形周溝墓の遺構確認中に確認面で、土壌として識別できた。そこで溝内土壌の想定のも

とに調査を行い、土壌のリソ・カルシウム分析を依頼した。以下は、その分析結果である。

(1) 第6号方形周溝墓溝内土壌埋土のリソ・カルシウム分析

竹原弘展 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

元宮遺跡第6号方形周溝墓の溝内で検出された土壌 SK1の埋土およびその周辺の土について蛍光 X 線分析によるリソ・カルシウム分析を行い、土壌 SK1中に人骨が存在した可能性を検討した。

2. 試料と方法

試料は、第6号方形周溝墓 SH6の溝内で検出された土壌 SK1の埋土および周辺土計8点である。内訳は土壌 SK1の最下層 (15層) から3点 (分析No1~3)、15層の上にある12層から1点 (分析No4)、SK1の上にある溝埋土の1層および2層から各1点 (分析No5、No6)、地山2点 (分析No7、No8) である (表1)。

分析は藤根ら (2008) の方法に従って行った。測定試料は、乾燥後、極軽く粉砕して塩化ビニル製リングに充填し、油圧プレス機で20・1分間プレスしたものを作成、使用した。

分析装置はエネルギー分散型蛍光 X 線分析装置である (株) 堀場製作所製分析顕微鏡 XGT-5000Type II を使用した。装置の仕様は、X線管が最大50kV、1.00mAのロジウム (Rh) ターゲット、X線ビーム径が100 μ mまたは10 μ m、検出器は高純度 Si 検出器 (Xerophy) で、検出可能元素はナトリウム (Na)~ウラン (U) である。また、試料ステージを走査させながら測定することにより元素の二次元的な分布画像を得る、元素マッピング分析も可能である。

本分析では、まず元素マッピング分析を行い元素の分布図を得て、その結果を基にリン (P) のマ

ッピング図の輝度の高い箇所を選び、ポイント分析を行った。また、ポイントを選ぶ際には、ジルコニウム (Zr) の L α 線がリンの K α 線のピークに近い場合、ジルコニウム (元素マッピングは K α 線で測定) の輝度の高い箇所は避けるよう留意した。測定条件は、元素マッピング分析では50kV、1.00mA、ビーム径100 μ m、測定時間2000sを5回走査、パルス処理時間 P3 に、ポイント分析では50kV、0.10~0.32mA (自動設定)、ビーム径100 μ m、測定時間500s、パルス処理時間 P4 に設定して行った。定量計算は、装置付属ソフトによる標準試料を用いないファンダメンタル・パラメーター法で行っており、半定量値である。

表1 分析試料

分析No	遺構	層位	備考
1	SH6周溝内 土壌SK1	15層	サンプル8 (土壌中央)
2		(最下層)	サンプル22 (土壌北西部)
3			サンプル27 (土壌南東部)
4		12層	サンプル6
5	SH6周溝	1層	サンプル1
6		2層	サンプル5
7	地山		サンプル10
8			サンプル18

3. 結果

各試料の元素マッピング図およびポイント分析の箇所5点を図1~8に、ポイント分析結果より酸化物の形で表した半定量値を表2に示す。

討し、かつカルシウムも高く検出される箇所に着目した。また、元は骨が存在していたが分解・拡散が進行し、現状ではほとんどリンが検出されないという可能性も十分にあり、検出されないからといって即座に骨が存在しなかったことを示すとは限らないと考えられる。

表2 半定量分析結果

分析 No.	試料	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	P ₂ O ₅	SO ₃	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO ₂	Fe ₂ O ₃	Rb ₂ O	SrO	Y ₂ O ₃	ZrO ₂
1	1	3.23	15.01	62.41	0.44	0.10	1.54	3.56	0.95	0.20	12.45	0.01	0.06	0.01	0.03
	2	1.24	14.67	61.20	1.08	0.08	1.58	2.11	0.96	0.28	16.64	0.02	0.05	0.02	0.07
	3	1.85	16.04	69.78	0.37	0.15	1.90	1.83	0.92	0.17	6.86	0.02	0.04	0.02	0.04
	4	0.00	17.54	69.10	0.47	0.13	1.85	1.71	1.04	0.15	7.90	0.02	0.04	0.01	0.04
	5	0.66	16.77	58.38	0.60	0.12	1.69	2.29	1.50	0.20	17.60	0.03	0.08	0.01	0.07
2	1	1.30	14.53	65.50	0.61	0.18	1.41	2.50	0.85	0.45	12.54	0.02	0.04	0.01	0.05
	2	0.86	15.95	54.69	8.17	0.13	2.12	9.41	1.10	0.14	7.31	0.03	0.06	0.02	0.02
	3	1.03	15.96	51.10	0.32	0.26	1.41	1.56	0.74	0.92	26.59	0.02	0.04	0.00	0.04
	4	1.62	14.41	68.69	0.13	0.21	2.02	1.53	0.80	0.12	10.36	0.02	0.04	0.01	0.04
	5	0.74	17.14	62.04	0.45	0.27	1.95	1.90	1.04	0.38	13.93	0.02	0.05	0.02	0.06
3	1	0.89	15.54	69.66	0.35	0.15	1.62	1.42	0.69	0.25	9.33	0.02	0.04	0.01	0.03
	2	2.19	17.14	64.13	0.30	1.38	3.50	1.86	1.42	0.14	7.82	0.03	0.05	0.01	0.04
	3	1.88	12.09	54.46	1.76	0.27	1.32	1.25	0.93	1.45	24.43	0.03	0.05	0.02	0.06
	4	0.27	15.38	58.11	0.36	0.12	1.20	1.30	0.92	1.09	21.14	0.01	0.04	0.01	0.03
	5	1.77	17.16	58.10	0.73	0.22	1.83	1.47	1.03	0.11	17.44	0.03	0.06	0.02	0.05
4	1	0.74	16.47	56.35	5.94	0.21	1.56	7.70	0.86	0.10	9.95	0.02	0.04	0.02	0.04
	2	0.72	15.75	58.16	0.74	0.19	1.51	2.62	0.81	0.75	18.62	0.03	0.05	0.01	0.03
	3	0.78	16.05	60.72	0.74	0.23	1.79	1.06	0.77	0.89	16.69	0.03	0.05	0.01	0.19
	4	0.92	15.15	48.77	1.08	0.25	1.77	1.55	0.70	1.18	28.48	0.03	0.05	0.01	0.05
	5	0.76	18.62	62.86	0.40	0.21	2.20	1.61	1.12	0.21	11.89	0.02	0.04	0.01	0.05
5	1	0.74	18.70	62.09	0.36	0.25	1.84	2.04	1.48	1.07	11.32	0.03	0.03	0.01	0.04
	2	2.30	17.14	62.77	0.66	0.16	1.85	2.93	0.85	0.60	10.62	0.02	0.05	0.01	0.03
	3	1.30	18.13	63.84	0.72	0.27	2.44	0.99	1.15	0.50	10.56	0.02	0.03	0.01	0.05
	4	1.69	17.12	63.35	0.24	0.17	2.08	1.06	1.19	0.28	12.71	0.03	0.03	0.01	0.04
	5	0.02	16.09	66.43	0.58	0.16	1.80	1.18	1.18	0.20	12.27	0.02	0.03	0.02	0.04
6	1	2.38	14.26	55.48	1.61	0.21	1.62	4.50	0.98	1.00	17.65	0.04	0.06	0.01	0.19
	2	1.62	16.64	62.17	1.03	0.23	1.44	1.17	0.87	0.69	24.02	0.02	0.05	0.02	0.04
	3	0.82	15.88	64.71	0.68	0.19	1.82	1.91	1.05	0.29	12.51	0.03	0.05	0.01	0.06
	4	1.05	16.57	65.11	0.50	0.16	2.32	1.69	1.27	0.23	10.97	0.02	0.05	0.01	0.03
	5	1.55	15.02	63.53	0.47	0.41	1.74	1.98	0.89	0.29	13.98	0.02	0.04	0.02	0.05
7	1	2.96	17.89	66.14	0.16	0.68	2.23	1.31	1.23	0.10	7.16	0.02	0.04	0.01	0.08
	2	0.02	16.92	60.49	3.26	1.52	2.49	1.65	0.83	0.45	12.25	0.02	0.05	0.01	0.05
	3	0.86	18.00	68.80	0.10	0.14	1.78	1.43	1.13	0.20	7.44	0.02	0.05	0.01	0.05
	4	3.40	16.39	61.67	0.23	0.11	1.35	2.47	1.85	0.25	12.18	0.02	0.04	0.01	0.03
	5	1.96	17.30	68.55	0.29	0.12	1.93	1.40	0.91	0.23	7.18	0.02	0.05	0.01	0.05
8	1	0.81	15.79	69.46	0.10	0.17	2.03	1.51	0.95	0.11	8.95	0.03	0.04	0.01	0.05
	2	0.96	16.54	63.73	0.67	0.16	1.92	1.42	0.95	0.24	13.27	0.02	0.05	0.02	0.05
	3	2.75	16.76	62.45	0.49	0.14	2.04	1.54	0.88	0.10	12.74	0.02	0.04	0.01	0.04
	4	0.04	16.81	55.59	0.72	0.14	1.61	1.13	0.88	0.45	22.50	0.02	0.05	0.01	0.05
	5	2.03	15.19	66.57	0.34	0.31	2.44	1.37	0.91	0.15	10.58	0.02	0.05	0.01	0.04

4. おわりに

土壌 SK1 埋土および周辺土について蛍光 X 線分析を行った結果、SK1 の埋土である15層と12層より、リン・カルシウム含有量が共に多い箇所が検出された。以上より、自然科学的見地から、SK1 内に骨・歯などが存在していた可能性を指摘できた。人骨の埋葬された土壌であったか否かについては、出土状況など考古学的所見と総合して判断することが望まれる。

引用文献

- 藤根久・佐々木由香・中村賢太郎 (2008)
 蛍光 X 線装置を用いた元素マッピングによるリン・カルシウム分析. 日本文化財科学会第25回大会研究発表要旨集, 108-109.

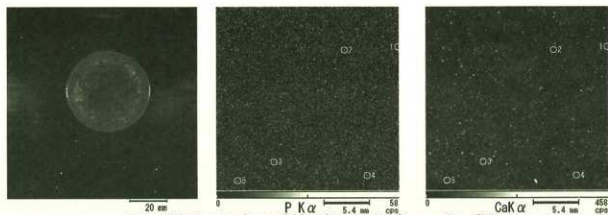


図1 分析No.1のプレス試料写真および元素マッピング図

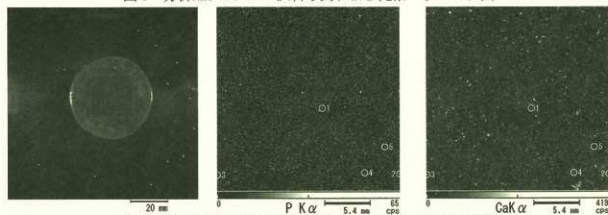


図2 分析No.2のプレス試料写真および元素マッピング図

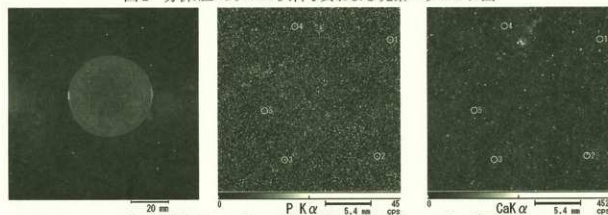


図3 分析No.3のプレス試料写真および元素マッピング図

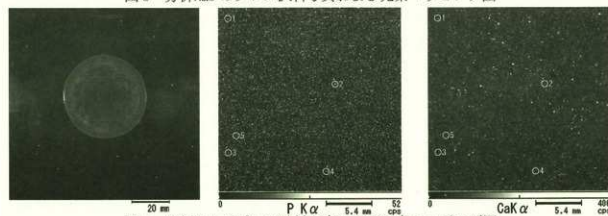


図4 分析No.4のプレス試料写真および元素マッピング図



図5 分析No.5のプレス試料写真および元素マッピング図

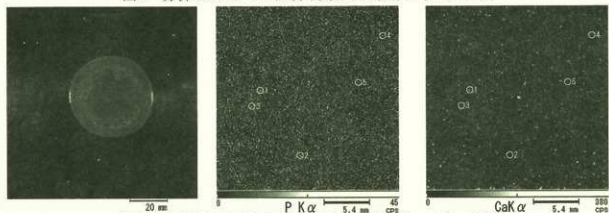


図6 分析No.6のプレス試料写真および元素マッピング図

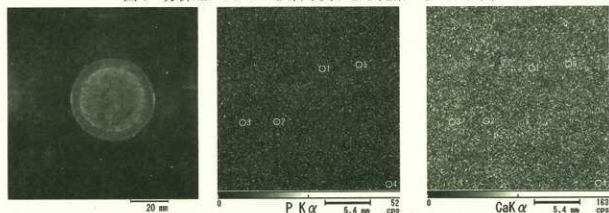


図7 分析No.7のプレス試料写真および元素マッピング図

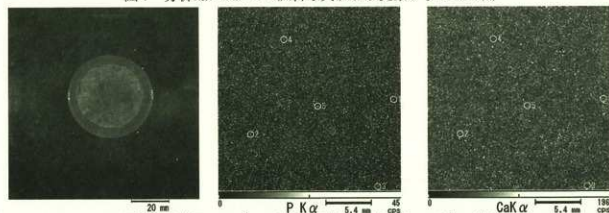


図8 分析No.8のプレス試料写真および元素マッピング図

(2) 樹種同定

元宿遺跡からは多数の木製品が出土した。当時の植生や木材利用の在り方を知るべく、独立行政

法人森林総合研究所の能城修一氏に樹種同定を依頼した。以下はその分析結果である。

元宿遺跡出土木材の樹種

元宿遺跡から出土した中・近世を主体とする木製品の樹種を報告する。内訳は、古墳時代の木製品が5点、中・近世のものが可能性のあるものも含んで14点、近世のものが98点、時期不明が1点の総数117点である。

樹種同定は、木取りの観察後、遺物から片刃カミソリをもちいて横断面、接線断面、放射断面の切片を切り取り、それをガムクロラール（抱水クロラール50g、アラビアゴム粉末40g、グリセリン20ml、蒸留水50mlの混合物）で封入しておこなった。各プレパラートにはST2-1195~1278およびST2-1291~1330の番号を付して標本番号とした。番号は連続ではなく富田後遺跡の試料番号が途中に含まれている。標本は森林総合研究所に保管されている。

試料117点中には針葉樹9分類群と広葉樹16分類群が見いだされた(表2)。以下には各分類群の木材解剖学的な記載をおこない、代表的な標本の光学顕微鏡写真を載せて同定の根拠を示す。

1. モミ属 *Abies* マツ科 図1: 1a, 1c (枝・幹材, ST2-1240)

樹脂道を普通は欠く針葉樹材。早材から晩材への移行は緩やかで晩材は量多く明瞭。放射組織は柔細胞のみからなり、単壁孔が著しい。

2. トウヒ属 *Picea* マツ科 図1: 2a, 2c (枝・幹材, ST2-1262)

垂直・水平樹脂道をもつ針葉樹材。早材から晩材への移行は緩やかで晩材は量多い。放射組織は上下に仮道管をもち、間の柔細胞には単壁孔が著

能城修一（森林総合研究所木材特性研究領域）
小林克也・黒沼保子（株式会社パレオ・ラボ）

しい。

3. マツ属 複維管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxylon* マツ科 図1: 3a, 3c (枝・幹材, ST2-1300)

垂直・水平樹脂道をもつ針葉樹材。早材から晩材への移行は緩やかで晩材の量は非常に多い。放射仮道管の上下壁は鋸歯をもち、分野壁孔は窓状。

4. マツ属 単維管束亜属 *Pinus* subgen. *Haploxylon* マツ科 図1: 4a, 4c (枝・幹材, ST2-1199)

垂直・水平樹脂道をもつ針葉樹材。早材から晩材への移行は緩やかで晩材の量は少ない。放射仮道管の上下壁は平滑で、分野壁孔は窓状。

5. スギ *Cryptomeria japonica* (L.f.) D.Don スギ科 図1: 5a, 5c (枝・幹材, ST2-1278)

樹脂道を欠く針葉樹材。早材から晩材への移行は緩やかで晩材は量多い。早材の終わりから晩材には樹脂細胞が散在する。分野壁孔は孔口が水平にちかく大きく開くスギ型で、普通1分野に2個。

6. コウヤマキ *Sciadopitys verticillata* (Thunb.) Siebold et Zucc. スギ科 図1: 6a, 6c (枝・幹材, ST2-1220)

樹脂道も樹脂細胞も欠く針葉樹材。早材から晩材への移行は緩やかで晩材はやや多い。分野壁孔は孔口が水平にちかく開く窓状で、普通1分野に1個。

7. ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* (Siebold et Zucc.) Endl. ヒノキ科 図1: 7a, 7c (枝・幹材, ST2-1225)

樹脂道を欠く針葉樹材。早材から晩材への移行

は緩やかで晩材は量少ない。早材の終わりから晩材には樹脂細胞が散在する。分野壁孔は孔口が垂直にちかくスリット状に開くトウヒ型で、普通1分野に2個。

8. サワラ *Chamaecyparis pisifera* (Siebold et Zucc.) Endl. ヒノキ科 図1: 8a, 8c (枝・幹材, ST2-1241)

樹脂道を欠く針葉樹材。早材から晩材への移行は緩やかで晩材は量やや多い。早材の終わりから晩材には樹脂細胞が散在する。分野壁孔は孔口が水平にちかく開くヒノキ型で、普通1分野に2個。

9. アスナロ *Thujaopsis dolabrata* (L.f.) Siebold et Zucc. ヒノキ科 図2: 9a, 9c (枝・幹材, ST2-1201)

樹脂道を欠く針葉樹材。早材から晩材への移行は緩やかで晩材は量多い。早材の終わりから晩材には樹脂細胞が散在する。分野壁孔はごく小型のヒノキ型〜スギ型で、普通1分野に2〜4個。

10. クリ *Castanea crenata* Siebold et Zucc. ブナ科 図2: 10a, 10b (枝・幹材, ST2-1269)

大型で丸い孤立道管が年輪の初めに3列ほど配列し、晩材では小型で薄壁の孤立道管が火炎状に配列する環孔材。道管の穿孔は単一。放射組織は単列同性。

11. ブナ属 *Fagus* ブナ科 図2: 11a, 11b (枝・幹材, ST2-1272)

小型で丸い孤立道管がほぼ均一に密に産材する散孔材。道管の穿孔は単一あるいは10本ほどの横棒からなる階段状。放射組織はほぼ同性で単列のものか幅10細胞を越える大型のものまである。

12. コナラ属クヌギ節 *Quercus* sect. *Aegilops* ブナ科 図2: 12a (枝・幹材, ST2-1294)

年輪の初めに大型で丸い孤立道管が1〜2列配列し、晩材では小型で厚壁の孤立道管が放射方向に並ぶ環孔材。道管の穿孔は単一。放射組織は同性で、単列のものど大型の複合状のものとなる。

13. コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 図2: 13a (枝・幹材, ST2-1275)

年輪の初めに大型で丸い孤立道管が1〜2列配列し、晩材では薄壁で小型の孤立道管が狭い火炎状に並ぶ環孔材。道管の穿孔は単一。放射組織は同性で、単列のものど大型の複合状のものとなる。

14. ムクノキ *Aphananthe aspera* (Thunb.) Planch. ニレ科 図2: 14a, 14b (枝・幹材, ST2-1205)

中型で厚壁のまるい道管が単独あるいは2〜3個放射方向に複合してまばらに散在する散孔材。道管の穿孔は単一。木部柔組織は早材で周囲状、晩材で翼状〜連合翼状。放射組織は異性で4細胞幅位、直立部に菱形結晶をもつ。

15. エノキ属 *Celtis* ニレ科 図2: 15a, 15b (枝・幹材, ST2-1304)

やや大型で丸い道管が年輪の初めに2列ほど配列し、晩材では徐々に小型化した道管が数個ずつ集まって斜めに断続的に配列する環孔材。道管の穿孔は単一で、小道管の内壁にはらせん肥厚をもつ。放射組織は異性で8細胞幅位となり、不完全な鞘細胞をもつ。

16. ケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino ニレ科 図2: 16a, 16b (枝・幹材, ST2-1274)

大型で丸い道管が年輪の初めに1〜2列ほど配列し、晩材では急激に小型化した道管が多数集まって斜め〜接線方向の帯をなす環孔材。道管の穿孔は単一で、小道管の内壁にはらせん肥厚をもつ。放射組織は上下端の1細胞が直立する異性で8細胞幅位となり、直立細胞には大型の菱形結晶をもつ。

17. クワ属 *Morus* クワ科 図2: 17a, 17b (枝・幹材, ST2-1252)

中型で丸い道管が年輪の初めに数列ゆるく集合し、晩材では徐々に小型化した道管が数個ずつ丸い塊をなして斜めに断続的に連なる環孔材。道管

の穿孔は単一で、小道管の内壁にはらせん肥厚がある。放射組織は上下端の1~2細胞が直立する異性で6細胞幅位。

18. ツバキ属 *Camellia* ツバキ科 図3: 18a, 18b (枝・幹材, ST2-1197)

ごく小型で薄壁の孤立道管が密に均一に散在する散孔材。道管の直径は年輪内で一様に小型化する。道管の穿孔は10本ほどの横棒からなる階段状。木部柔組織は短接線状。放射組織は異性で2細胞幅、直立部に大型の菱形結晶をもつ。

19. トチノキ *Aesculus turbinata* Blume トチノキ科 図3: 19a, 19b (枝・幹材, ST2-1266)

小型で丸い道管が単独あるいは2~3個放射方向に複合して均一に散在する散孔材。道管の穿孔は単一で、内壁にはらせん肥厚がある。放射組織は単列同性で、層階状に配列する。

20. ケンボナシ属 *Hovenia* クロウメモドキ科 図3: 20a, 20b (枝・幹材, ST2-1246)

大型で丸い道管が年輪の初めに3列ほど配列し、晩材では徐々に小型化した厚壁の道管が単独あるいは2~3個放射方向に複合して散在する環孔材。道管の穿孔は単一。放射組織は異性で4細胞幅位。

21. シナノキ属 *Tilia* シナノキ科 図3: 21a, 21b (枝・幹材, ST2-1306)

小型で薄壁の道管が単独あるいは放射方向2個ほど複合してやや密に散在する散孔材。木部柔組織は接線状で著しい。道管の穿孔は単一で、内壁にはらせん肥厚がある。放射組織は同性で5細胞幅位となり、小型の放射組織と道管要素、柔細胞ストランドは層階状に配列する。

22. コシアブラ *Chengiopanax sciadophylloides* (Franch. et Sav.) C.B. Shang et J.Y. Huang ウコギ科 図3: 22a, 22b (枝・幹材, ST2-1265)

年輪の初めに中型の孤立道管が断続的に配列し、それ以外の部分では小型で丸い道管が単独あるいは放射方向に2~4個複合して密に散在する半環孔材。道管の穿孔は単一。放射組織は上下端の1

列が直立する異性で3細胞幅位。

23. カキノキ属 *Diospyros* カキノキ科 図3: 23a, 23b (枝・幹材, ST2-1303)

厚壁で中型の道管が単独あるいは放射方向に2~3個複合して疎らに散在する散孔材。道管の穿孔は単一。木部柔組織は接線状、しばしば多室の柔細胞に菱形結晶をもつ。放射組織は異性で2~3細胞幅、放射組織と道管要素、柔細胞ストランドは層階状に配列する。

24. トネリコ属 シオジ節 *Fraxinus* sect. *Fraxinaster* モクセイ科 図3: 24a, 24b (枝・幹材, ST2-1270)

大型で丸い道管がほぼ単独で年輪の初めに1~2列配列し、晩材ではやや急に小型化した厚壁の道管が単独あるいは放射方向に2~3個複合して疎らに散在する環孔材。道管の穿孔は単一。放射組織は同性で2細胞幅。

25. キリ *Paulownia tomentosa* (Thunb.) Steud. ノウゼンカズラ科 図3: 25a, 25b (枝・幹材, ST2-1250)

大型で丸い道管がほぼ単独で年輪の初めに3列ほど配列し、晩材では徐々に小型化した道管が単独あるいは放射方向に2個ほど複合して散在する環孔材。道管の穿孔は単一。木部柔組織は早材で周囲状、晩材で翼状~連合翼状。放射組織は同性で3細胞幅位。

元宿遺跡では、各時代を通じてスギの利用が共通しており、中でも近世では樽桶側板や柱としての利用が目立っている(表2)。それ以外では、マツ属複雑管束亜属の板や、ヒノキの蓋、ケヤキとキリの下駄、トチノキの漆器、カキノキ属の農具といった利用が多く見られる。またトウヒ属やマツ属単維管束亜属、コウヤマキといった、関東平野周辺には生育しない樹種が出土しており、江戸時代における木材や木製品の流通を反映したものと考えられる。

表1 元宿遺跡出土木材樹種同定試料

試料番号	prep no.	pr	樹種	図版番号	遺構	器種	木取り	時期
1	ST2-1195		X	218図60	SE64	不明品	半割り	中・近世
2	ST2-1196		スギ	217図55	SE57	不明	板目	中・近世
3	ST2-1197		ツバキ属	216図18	SE31	不明	芯持丸木	近世
4	ST2-1198		マツ属 複雑管束亜属	217図45	SE43	不明	板目	近世
5	ST2-1199		マツ属 単維管束亜属	218図61	SE67	底板	板目	近世
6	ST2-1200		サワラ	217図53	SE49	底板	板目	中・近世か
7	ST2-1201		アスナロ	222図123	SE80	底板	板目	近世
8	ST2-1202		マツ属 複雑管束亜属	217図44	SE43	板材	板目	近世
9	ST2-1203		スギ	217図52	SE46	板材	板目	中・近世か
10	ST2-1204		スギ	217図50	SE45	不明	芯持丸木	近世
11	ST2-1205		ムクノキ	217図49	SE45	板状製品	追板目	近世
12	ST2-1206		スギ	216図31	SE41	板材	板目	近世
13	ST2-1207		スギ	216図29	SE41	側材	板目	近世
14	ST2-1208		スギ	216図28	SE41	側材	板目	近世
15	ST2-1209		スギ	216図30	SE41	側材	板目	近世
16	ST2-1210		スギ	217図57	SE57	底板	板目	中・近世
17	ST2-1211		アスナロ	220図89	SE69	不明	半割り	近世
18	ST2-1212		スギ	216図33	SE41	側板	板目	近世
19	ST2-1213		スギ	215図15	SE30	側板	板目	近世
20	ST2-1214		スギ	215図13	SE30	側板	板目	近世
21	ST2-1215		スギ	215図11	SE30	側板	板目	近世
22	ST2-1216		スギ	215図7	SE30	側板	板目	近世
23	ST2-1217		スギ	215図9	SE30	側板	板目	近世
24	ST2-1218		スギ	215図10	SE30	側板	板目	近世
25	ST2-1219		スギ	215図6	SE30	側板	板目	近世
	ST2-1220		コウヤマキ	215図6	SE30	栓	芯無し割り出し	近世
26	ST2-1221		スギ	215図14	SE30	側板	板目	近世
	ST2-1224		ヒノキ	219図81	SE69	側板	板目	近世
27	ST2-1225		ヒノキ	219図81	SE69	栓	芯無し割り出し	近世
28	ST2-1226		スギ	219図85	SE69	側板	板目	近世
29	ST2-1227		スギ	219図75	SE69	側板	板目	近世
30	ST2-1228		スギ	218図63	SE69	側板	板目	近世
31	ST2-1229		スギ	218図66	SE69	側板	板目	近世
32	ST2-1230		スギ	219図72	SE69	側板	板目	近世
33	ST2-1231		スギ	219図78	SE69	側板	板目	近世
	ST2-1232		サワラ	219図78	SE69	木釘	芯無し割り出し	近世
34	ST2-1233		スギ	219図79	SE69	側板	板目	近世
35	ST2-1234		スギ	219図74	SE69	側板	板目	近世
36	ST2-1236		スギ	218図65	SE69	側板	板目	近世
37	ST2-1237		スギ	219図77	SE69	側板	板目	近世
38	ST2-1238		モミ属	258図47	SX1	箱状品の側板	板目	近世
39	ST2-1239		アスナロ	284図241	F-16G	片脚切筋	芯持丸木	不明
40	ST2-1240		モミ属	222図117	SE70	板材	板目	中・近世
41	ST2-1241		サワラ	222図119	SE76	板材	板目	中・近世か
42	ST2-1242		スギ	265図1	SX4	底板	板目	中・近世か
43	ST2-1243		ヒノキ	254図4	SD1	蓋	板目	近世
44	ST2-1244		ヒノキ	264図35	SX3	蓋	追板目	近世
45	ST2-1245		ヒノキ	254図3	SD1	蓋	板目	近世
	ST2-1246		ケンボナシ属	254図7	SD1	下駄	板目	近世
46	ST2-1247		ケヤキ	254図7	SD1	下駄 (前歯)	板目	近世
47	ST2-1248		キリ	254図2	SD1	板状製品	芯持切筋	近世
48	ST2-1249		キリ	254図1	SD1	板状製品	芯持切筋	近世
49	ST2-1250		キリ	254図8	SD1	下駄	板目	近世

試料番号	prep no.	pr	樹種	図版番号	遺構	器種	木取り	時期
50	ST2-1251		ケヤキ	254図6	SD1	下駄の歯か	板目	近世
51	ST2-1252		クワ属	222図118	SE70	丸太材	芯持丸木	中・近世
52	ST2-1253		ケヤキ	254図5	SD1	板状製品	板目	近世
53	ST2-1254		スギ	218図68	SE69	側板	板目	近世
54	ST2-1255		スギ	218図69	SE69	側板	板目	近世
55	ST2-1256		スギ	218図62	SE69	側板	板目	近世
56	ST2-1257		スギ	220図87	SE69	側板	板目	近世
57	ST2-1258		スギ	218図70	SE69	側板	板目	近世
58	ST2-1259		スギ	219図82	SE69	側板	板目	近世
59	ST2-1260		スギ	215図3	SE27	下駄	芯持板目	近世
60	ST2-1261		スギ	219図83	SE69	側板	板目	近世
61	ST2-1262		トウヒ属	217図43	SE43	底板	板目	近世
	ST2-1263		トウヒ属	217図43	SE43	側板	板目	近世
62	ST2-1264		トチノキ	254図9	SD1	漆桶	横木取り	近世
63	ST2-1265		コシアブラ	264図38	SX3	漆蓋	横木取り	近世
64	ST2-1266		トチノキ	264図40	SX3	漆桶	横木取り	近世
65	ST2-1267		トチノキ	264図37	SX3	漆蓋	横木取り	近世
66	ST2-1268		ケヤキ	216図19	SE33	漆桶	横木取り	近世
67	ST2-1269		クリ	264図39	SX3	漆桶	横木取り	近世
68	ST2-1270		トネリコ属 シオジ節	217図54	SE51	漆桶	横木取り	中・近世
	ST2-1271		トチノキ			漆桶	横木取り	
69	ST2-1272		ブナ属	264図36	SX3	漆蓋	横木取り	近世
70	ST2-1273		×	254図13	SD123	棒状製品	芯持丸木	近世
71	ST2-1274		ケヤキ	254図11	SD123	柱材か	みかん割り	近世
72	ST2-1275		コナラ属 コナラ	220図93	SE69	杵	芯持丸木	古墳時代
73	ST2-1276		スギ	221図111	SE69	板材	板目	古墳時代
74	ST2-1277		スギ	221図109	SE69	板材	板目	古墳時代
75	ST2-1278		スギ	221図112	SE69	板材	板目	古墳時代
	ST2-1279		アスナロ			自然木	枝抜け	古墳時代
	ST2-1280		スギ			自然木	板目	古墳時代
	ST2-1281		マツ属 複雑管束亜属			板材	追板目	
	ST2-1282		コナラ属 クヌギ節			板材	板目	
	ST2-1283		クリ			自然木	芯持丸木	
	ST2-1284		スギ			柱根か	板目	
76	ST2-1291		スギ	215図1	SE14	杭	芯持丸木材	近世
77	ST2-1292		スギ	220図88	SE69	堅杵	半割り	古墳時代
78	ST2-1293		スギ	216図23	SE33	側板	板目	近世
79	ST2-1294		コナラ属 クヌギ節	216図24	SE33	側板	板目	近世
80	ST2-1295		スギ	217図59	SE64	板材	板目	中・近世
81	ST2-1296		サワラ	217図56	SE57	側板	板目	中・近世
82	ST2-1297		マツ属 複雑管束亜属	217図46	SE43	板材	板目	近世
83	ST2-1298		スギ	216図16	SE30	側板	板目	近世
84	ST2-1299		スギ	215図12	SE30	側板	板目	近世
85	ST2-1300		マツ属 複雑管束亜属	217図47	SE44	板材	追板目	近世
86	ST2-1301		×	215図4	SE29	板材	板目	近世
87	ST2-1302		カキノキ属	217図42	SE43	農具か	芯無し削り出し	近世
88	ST2-1303		カキノキ属	217図41	SE43	農具か	芯無し削り出し	近世
89	ST2-1304		エノキ属	222図122	SE80	角材	板目	近世
90	ST2-1305		スギ	216図17	SE31	側板	板目	近世

試料番号	prep no.	pr	樹種	図版番号	遺構	器種	木取り	時期
91	ST2-1306		シナノキ属	221図114	SE69	自然木	芯持丸木	近世
92	ST2-1307		ヒノキ	216図26	SE39	部材	板目	近世
93	ST2-1308		スギ	217図51	SE45	棒状製品	芯持丸木	近世
94	ST2-1309		スギ	216図37	SE41	底板	板目	近世
95	ST2-1310		スギ	216図38	SE41	底板	板目	近世
96	ST2-1311		スギ	216図34	SE41	側板	板目	近世
97	ST2-1312		スギ	216図32	SE41	側板	板目	近世
98	ST2-1313		スギ	216図35	SE41	側板	板目	近世
99	ST2-1314		スギ	216図36	SE41	側板	板目	近世
100	ST2-1315		スギ	216図27	SE41	側板	板目	近世
101	ST2-1316		スギ	215図8	SE30	側板	板目	近世
102	ST2-1317		ケヤキ	222図115	SE70	不明	半割り	中・近世
103	ST2-1318		ヒノキ	222図116	SE70	棒状製品	板目	中・近世
104	ST2-1319		スギ	218図67	SE69	側板	板目	近世
105	ST2-1320		スギ	218図71	SE69	側板	板目	近世
106	ST2-1321		スギ	218図64	SE69	側板	板目	近世
107	ST2-1322		スギ	219図73	SE69	側板	板目	近世
108	ST2-1323		スギ	219図76	SE69	側板	板目	近世
109	ST2-1324		スギ	219図80	SE69	側板	板目	近世
110	ST2-1325		スギ	254図12	SD123	柱材か	芯持丸木	近世
	ST2-1326		スギ	254図12	SD123	柱材か	芯持丸木	近世
111	ST2-1327		スギ	254図14	SD123	柱材	芯持丸木	近世
112	ST2-1328		スギ	221図113	SE69	板材	造極目	近世
113	ST2-1329		クリ	215図2	SE20	棒状製品	芯持丸木	中・近世
114	ST2-1330		スギ	221図110	SE69	板材	割り材	近世

表2 元宿遺跡から出土した木製品類の時代ごとの器種と樹種

器種	時代																			不明 丸木							
	5	6	1	3	2	4	1	2	3	4	5	6	8	9	10	11	12	13	14		15	16	17	18	19		
樹種	古墳時代	中・近世				中・近世か				近世																	
	板	型枠	材丸木	漆器	製品	側板	板	底板	板	費用	漆器	側板	底板	板	木釘	漆器	下駄	製品	柱	角材	割材	丸木	自然木	計			
モミ属							1										1							1			
トウヒ属												1	1											2			
マツ属海州産系																						3	1	4			
マツ属早稲産系												1												1			
スギ	3	1	1			1	1	1	1	45	2					1		1	3	3		1	1	57			
コウヤマキ													1											1			
ヒノキ					1							1		1					1					6			
サクラ						1		1	1						1									1			
アスナロ												1										1		3			
クリ					1						1													1			
ブナ属											1													1			
コナラ属クヌギ節											1													1			
コナラ属コナラ節	1																							1			
ムクノキ																						1		1			
エノキ属																						1		1			
ケヤキ			1								1								2	1	1			5			
クワ属				1																				1			
ツバキ属																								1			
トチノキ											3													3			
ケンゴザン属																								1			
シナノキ属																								1			
コンアブク											1													1			
カキノキ属										2														2			
トネリコ属シオジ節				1																				3			
ササ																								3			
総計	3	2	2	1	1	2	2	2	2	2	2	7	48	5	2	1	3	1	3	4	4	4	7	1	2	1	98

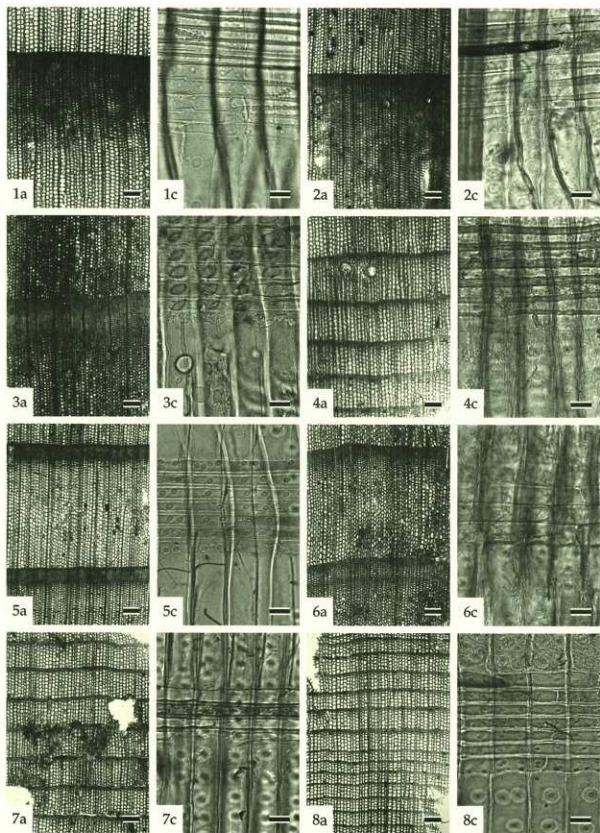


図1. 元宿遺跡出土木材の顕微鏡写真 (1)

1a-1c: モミ属 (ST2-1240), 2a-2c: トウヒ属 (ST2-1262), 3a-3c: マツ属複雑管束亜属 (ST2-1300),
 4a-4c: マツ属単維管束亜属 (ST2-1199), 5a-5c: スギ (ST2-1278), 6a-6c: コウヤマキ (ST2-1220),
 7a-7c: ヒノキ (ST2-1225), 8a-8c: サワラ (ST2-1241). a: 横断面 (スケール= 200 μ m), c: 放射断面 (スケール= 50 μ m).

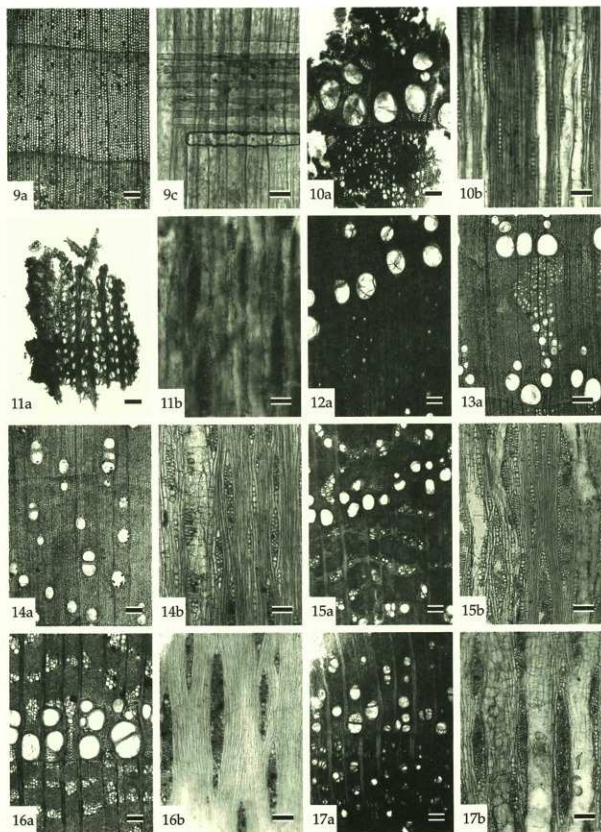


図2. 元宿遺跡出土木材の顕微鏡写真 (2)

9a-9c: アスナロ (ST2-1201), 10a-10b: クリ (ST2-1269), 11a-11b: ブナ属 (ST2-1272), 12a: コナラ属クヌギ節 (ST2-1294), 13a: コナラ属コナラ節 (ST2-1275), 14a-14b: ムクノキ (ST2-1205), 15a-15b: エノキ属 (ST2-1304), 16a-16b: ケヤキ (ST2-1274), 17a-17b: クワ属 (ST2-1252). a: 横断面 (スケール=200 μm), b: 接線断面 (スケール=100 μm), c: 放射断面 (スケール=50 μm).

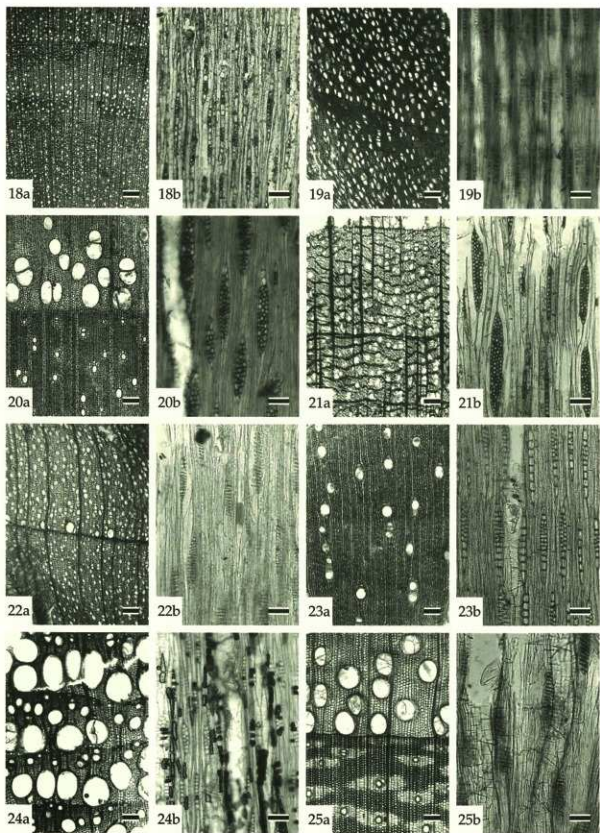


図3. 元宿遺跡出土木材の顕微鏡写真(3)

18a-18b: ツバキ属 (ST2-1197), 19a-19b: トチノキ (ST2-1266), 20a-20b: ケンボナシ属 (ST2-1246), 21a-21b: シナノキ属 (ST2-1306), 22a-22b: コシアブラ (ST2-1265), 23a-23b: カキノキ属 (ST2-1303), 24a-24b: トネリコ属シオジ節 (ST2-1270), 25a-25b: キリ (ST2-1250). a: 横断面 (スケール=200 μ m), b: 接線断面 (スケール=100 μ m).

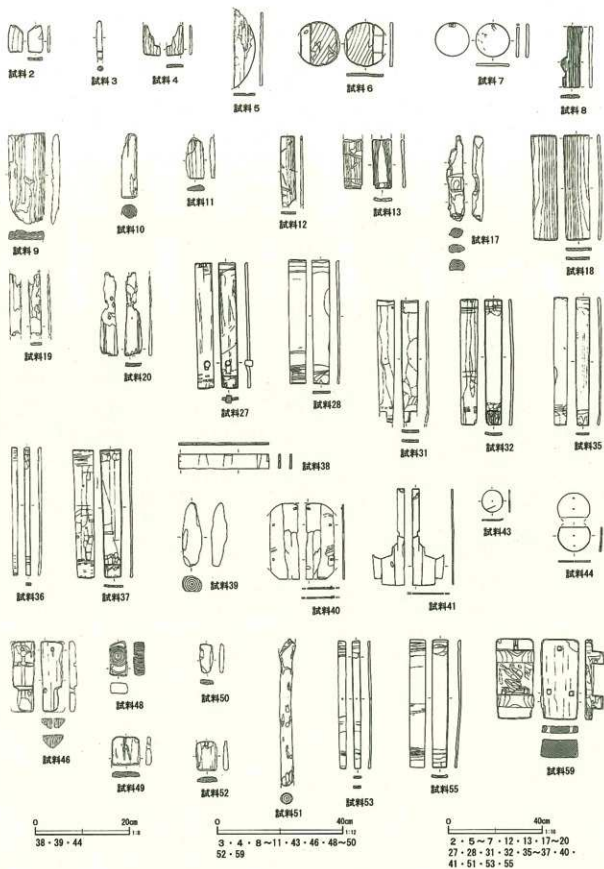


图 4 樹種同定試料 (1)

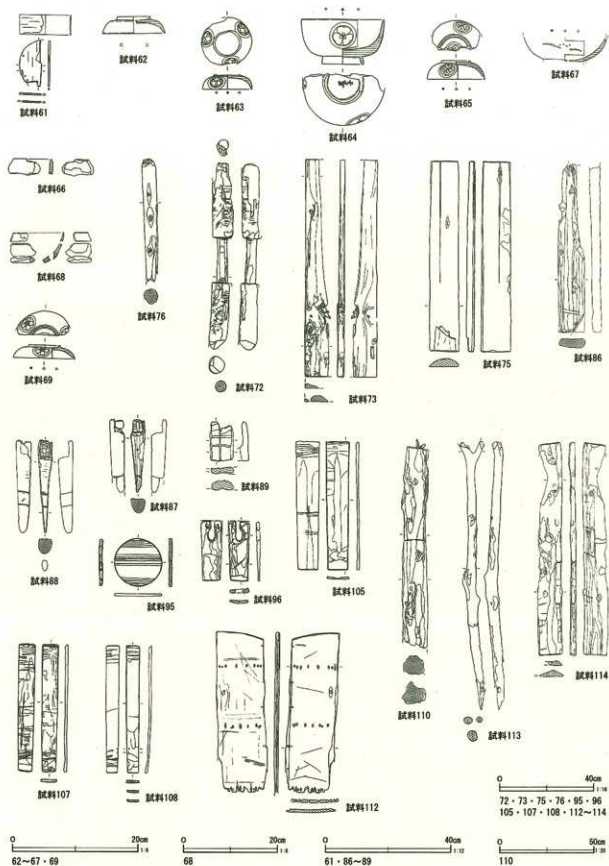


图5 樹種同定試料(2)

V 調査のまとめ

1. 元宿遺跡の調査成果

元宿遺跡は、比企郡川島町内の荒川低地上に立地する遺跡である。川島町域は、旧流路をはじめとして多数の河川によって形成された自然堤防が明瞭に残る地域であり、これらの自然堤防上に遺跡が存在していると考えられる。

一般国道468号首都圏中央連絡自動車道関連で、川島町内で調査された遺跡には、すでに調査報告書が刊行されている白井沼遺跡(栗岡2007)と東野・平沼一丁田遺跡(岡田2009)があり、この他に未整理段階の富田後遺跡(2009年下半期より整理開始予定)がある。これらの調査のメスが入ることによって、従来知られていた川島町の歴史資料がさらに豊かなものになりつつある。

今回、元宿遺跡の調査において検出された遺構と遺物は、以下のとおりである。縄文時代：土壇1基(縄文土器)、古墳時代：住居跡17軒、周溝状遺構11基、方形周溝墓6基、掘立柱建物跡10棟、井戸跡10基、土壇53基、溝跡8条等(土師器・須恵器・石製品・鉄製品等)、古代：住居跡1軒、掘立柱建物跡7棟、井戸跡6基、土壇7基、溝跡4条(土師器・須恵器・石製品・鉄製品等)、中・近世：掘立柱建物跡32棟、井戸跡74基、土壇225基、溝跡140条等(陶磁器類・石製品・金属製品・木製品等)。

以下に、元宿遺跡の変遷について、ごく簡単に述べておきたい。

縄文時代の段階では、後期の土壇が1基検出されたにとどまる。川島町内では、それぞれ別な自然堤防上にある東野(前期)、平沼一丁田遺跡(中期)の資料が報告されているほか、現在未整理段階にある富田後遺跡(後期)等が知られている。今回、元宿遺跡の載る自然堤防上においても縄文時代の遺構・遺物の存在が確認できた意義は大きい

といえる。

古墳時代前期の方形周溝墓と、周溝状遺構の位置関係は、調査区内の標高が低い位置に建物跡と推定されている周溝状遺構が分布し、高い位置に方形周溝墓が分布するという関係にある。

古墳時代後期に入ると、竪穴住居跡は地形的に高い位置にのみ分布しているが、掘立柱建物跡や溝跡・土壇などは全体的な広がりを見せ遺構数も増加する。

奈良時代には、全体的に遺構数が減少し、県内の低地遺跡の減少傾向と同様な様相を呈している。

平安時代には、さらに遺構・遺物数が減少するようである。

中世については、検出された遺物はごく少数であった。この時期の遺構も存在していると考えられるが、特定するには至らなかった。

このような点から、奈良時代～中世は、集落として小規模であったと推定される。

近世初頭になると遺物が若干増加するが、後世の遺物と共存する例が多く、遺構の特定ができるものは少ない。近世中期、18世紀中ごろ以降では遺物が増加することから、掘立柱建物跡や溝跡・井戸跡等の遺構の多くは、この時期以降に増加していったと推定される。

こういった中で、その起源は特定できないが、「元宿」の地名の由来となった集落形態が育まれていったと考えられる。そしてその集落は、現在にまで続いているのである。

なお、遺跡が所在する大字「三保谷」について、『新編武蔵風土記稿』には、「三保谷村これ其本郷なるべし、郷中表村に三保谷四郎が舊跡あり、壽永・文治の頃の人なり、されば此郷名によりてなのりにしや(以下、略)」との記述がみられる。

2. 元宿遺跡と川島町の縄文時代の遺跡

川島町では元宿遺跡を含め、近年調査例の増加により、縄文時代の様相が徐々に明らかになってきている(金子2004、栗岡2007、宮井他2009)。ここではそれらの成果を踏まえ、川島町の縄文時代の遺跡について概観していくこととしたい。

川島町は、自然堤防の地形が良好に残る特徴的な地域である。町では、荒川に沿って築かれた堤防を境に居住地側を堤内、荒川側を堤外と呼んでいる。堤内には古期・中期・新規に分類される自然堤防の地形が残存し、中期や新期自然堤防上に縄文時代の遺跡が分布している。また堤外にも自然堤防は存在していたと考えられることから、それぞれ地域別に考えていくこととする。

新期自然堤防上の遺跡(第285図1~16)

新期自然堤防は、町中央部を縦断するものと、町西部の都幾川・越辺川沿いのものがある。中央部の新期自然堤防は、縄文時代以降安定して多くの遺跡が営まれている。遺跡としては、今回報告する元宿遺跡、村並遺跡(川島町2006)が挙げられる。元宿遺跡からは、1の堀之内Ⅱ式土器が出土した土壌が検出された。2~7の後期前葉から後葉の土器が調査区内から出土している。村並遺跡からは、8の前期や9の中期の土器片も検出されたが、中心は10~15の堀之内Ⅱ式を主体とする後期の土器群であった。また、元宿遺跡の流路を挟む対岸の富田後遺跡(平成21年度整理中)からも、堀之内Ⅱ式期の土壌が検出されている。都幾川・越辺川沿いの自然堤防上では、堂地遺跡(若松他2000)から16の後期前葉の堀之内Ⅱ式土器が1点検出されている。

中期自然堤防上の遺跡(同図17~25)

中期自然堤防は、新期自然堤防と重複するため分析され形状は不明瞭である(第285図)。遺跡は平沼一丁田遺跡(宮井他2009)、白井沼遺跡(栗岡2007)が挙げられる。平沼一丁田遺跡からは、17の中期後葉加曾利EⅠ式土器が出土した土壌

と、18~21の中期中葉勝坂式土器が出土した集石土壌が検出されている。白井沼遺跡からは、22の中期後葉加曾利EⅠ式土器が出土した埋甕が検出され、他に23の中期中葉勝坂式土器、24・25の後期初頭称名寺式土器などが検出されている。

堤外の遺跡(同図26~37)

堤外の遺跡は、厚い堆積層に阻まれており検出は困難で、31~37などの遺物が検出された荒川沿いの河床遺跡が知られていた(川島町2006)。ところが、近年芝沼堤外遺跡(金子2004)、東野遺跡(宮井他2009)が調査され、地表下深くから遺構が検出された。遺跡が南北方向に分布する状況から、自然堤防が埋没していると考えられる。東野遺跡からは、前期末葉十三菩提式期の住居跡8軒が検出され、26や27などの十三菩提式土器が出土した。芝沼堤外遺跡では、諸磯b式から十三菩提式の遺物包含層が層位的に形成されており、28~30などの土器が出土した前期後半諸磯式期の住居跡3軒が検出された。

川島町南端の入間川沿いの遺跡(同図38~54)

川島町の南端の入間川沿いの河床から検出された遺跡群で、前期中前葉関山Ⅱ式から黒浜式土器が主体となって検出されている。入間川河床遺跡D地点からは、46の早期後葉条痕文系土器が1点検出されている。

以上、川島町の縄文時代の遺跡について地域別に概観してきたが、主体となる時期が分かれることが特徴的である。新期自然堤防は後期前葉から後葉、中期自然堤防は中期中葉から後葉、堤外は前期後葉から末葉である。南端の遺跡群については、遺物の主体が前期前葉で、部分的に残存する古期自然堤防に立地していた可能性が考えられる。自然堤防ごとに縄文時代の遺跡の時期が異なることは、自然堤防の成り立ちや様相を知る上で重要な手がかりとなっている。今後、調査例が増加すればさらに明らかになっていくと考えられる。



第285図 川島町の縄文時代の遺跡分布と出土土器

3. 古墳時代前期

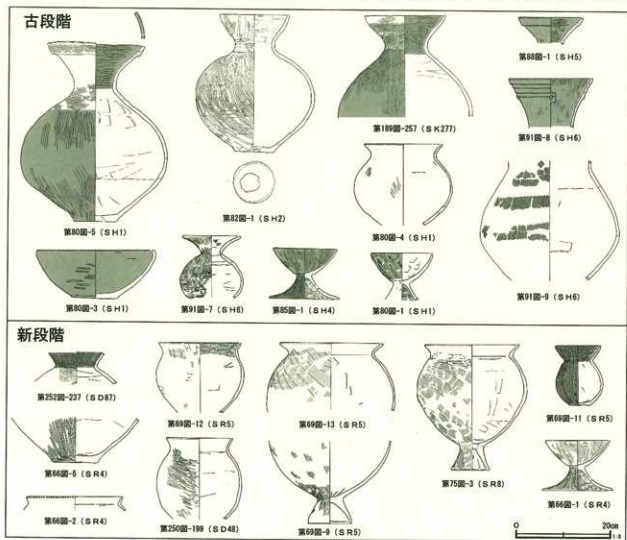
(1) 出土土器について

本遺跡からは、古墳時代前期の方形周溝墓6基、「周溝」状遺構（以下周溝と呼称する）11基、溝跡8条、土壌53基が検出されている。本節では、出土土器の位置づけ、方形周溝墓と周溝の区別とその様相についてとりまとめる。また、第6号方形周溝墓の溝内土壌の土壌の分析において有意な結果が得られたため、最後にそれについて言及したい。

本遺跡出土の土器は、第1・2・4号周溝墓以外は全形の知れるまとまった資料は出土していない。また、遺構間に明瞭な重複関係がなく、層位論的前後関係は把握できない。従って、安易な評

価は差し控えるべきであろう。本論は、あくまで今後の検討のための予報的なものである。

資料は大まかに新旧の2段階に分けられる（第286図）。古段階は、方形周溝墓群、第277号土壌出土資料が該当する。いずれもC区の遺構である。壺は中位に最大径のある球形胴で、頸部は屈曲せず、「し」の字状に口縁部に至る。口縁部は直線的に大きく開く。複合口縁のものと単口縁のものがある。複合部は幅が狭く、口縁部の延長線で大きく開いたままになっている。単口縁のものは端部がやや内彎する。7の小型壺は口縁が外反して大きく開いている。文様は第1号周溝墓5、第277号土壌出土のものみに網目状捺糸文が施されている。甕は1点のみの出土である。球形胴で頸部



第286図 古墳時代前期の土器

はあまり屈曲せず、口縁部は外側に開く。高坏は坏部が小さいものしか出土していない。坏部がやや内彎するもので、脚部は大きく開く。また、第6号周溝墓では吉ヶ谷式の壺と甕が出土している。

新段階は「周溝」群、第1・74・48号溝跡出土資料が該当する。壺は全形の知れるものがないが、第87号溝跡236は「く」の字に屈曲した頸部である。文様が施されているものはない。古段階と対照的に台付甕が多いのが特徴である。第5号周溝13は球形胴で、口縁部が長く大きく開くものである。やや古相を呈している。それに対して第8号周溝のものは頸部の括れが弱く、口縁部が短い。より新相の様相を呈している。更に、第48号溝跡も新しく評価できるかもしれない。ただ、限られた個体数の中で個々の土器をもとに時期を云々するのは適当ではないであろう。ここでは、球形胴に「く」の字接合で直線的な口縁部が付く段階として新段階を規定しておきたい。胴部に対して脚台部がいずれも小さめである点も時期的な特徴を示しているものと考えられる。

古墳時代前期の土器については、既に県内各所の報告書で触れてきた。本遺跡の古段階は蓮田市久台・ささら古段階（福田2007）、本遺跡の新段階は久台・ささら新段階、東松山市反町遺跡古段階（福田2009a）に対応すると考えられる。現在

古式土師器の基準の一つになっている考古学協会新潟シンポ編年（日本考古学協会1993）では7期に該当する。

本遺跡に比較的近い上尾市稲荷台遺跡の編年（書上1994・石坂2000）との対応は残念ながら筆者にはとらえきれない面があるが、本遺跡新段階がその第2段階に対応することは概ね首肯されると思われる。

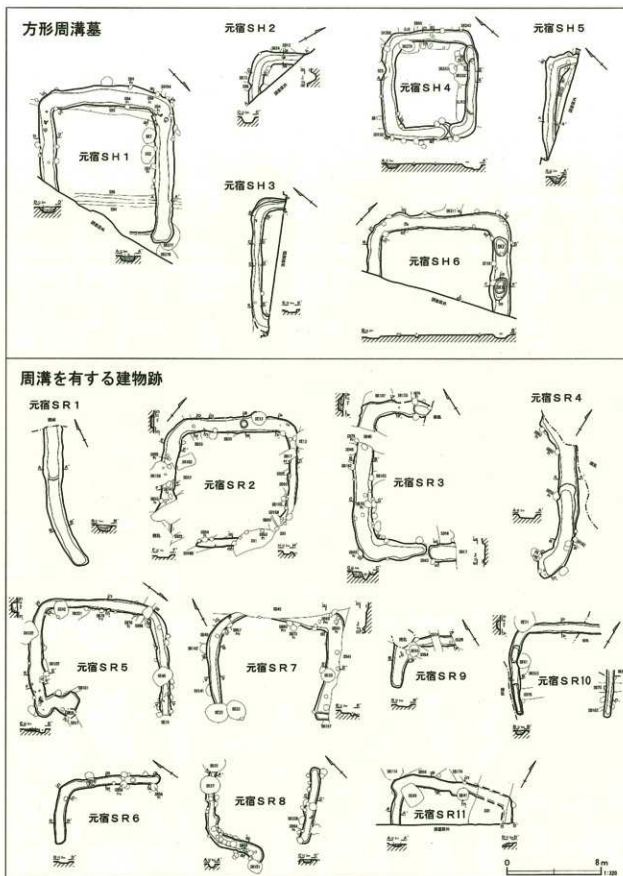
以上、出土土器の位置づけを試みたわけだが、全体的にC区の周溝墓とA区の周溝、溝跡では出土器種も異なっており充分な比較には至らなかった。いずれにせよ、近傍の富田後遺跡の資料と合わせて再度検討することにしたい。

(2) 方形周溝墓と周溝について

本遺跡における方形周溝墓と周溝の呼称の振り分けは、調査時に行ったものである。後者の周溝について筆者は基本的に建物跡の外部施設として考えている。この両者が混在していることが東京低地、荒川低地を中心とした東京都、埼玉県の低地に立地する遺跡の遺構分布の特徴である可能性については別に述べた（福田2009b）。方形周溝墓、周溝を有する建物跡、各々の認定する目安については、低地シリーズ（1）～（3）、『方形周溝墓の再発見』（福田2000）で提示し、その後の検

第35表 元宿遺跡の周溝墓と周溝

遺構	平面形	開口部	周溝内	規模 (m)		周溝幅 (m)		深さ (m)		施設	備考
				長軸	短軸	最狭	最広	最浅	最深		
AКСR 2	隅丸方形	1-隅か	隅丸方形	10.0	9.2	0.7	1.4	0.2	0.4		
AКСR 3	隅丸方形	1-中央か	隅丸方形	11.4	-	1.2	2.0	0.2	0.5		
AКСR 4	隅丸方形	一辺開口か	隅丸方形	12.0	-	1.5	2.0	0.3	-		
AКСR 5	隅丸方形	-	隅丸方形	9.2	10.2	0.7	1.2	0.2	0.5		
AКСR 7	隅丸方形	一辺開口か	隅丸方形	8.8	9.7	0.6	1.4	0.2	0.4		
AКСR 8	隅丸方形	2	隅丸方形	6.4	8.4	0.8	0.9	0.2	0.3		
AКСR 9	隅丸方形	1-中央か	隅丸方形	-	-	0.8	1.4	0.2	-		
AКСR 10	隅丸方形	一辺開口か	隅丸方形	7.8	7.1	0.5	0.9	0.3	0.4		
CКСH 1	隅丸方形	1-隅か	長方形	11.2	9.12	1.2	1.8	0.3	0.5		
CКСH 2	隅丸方形	-	隅丸方形	-	-	0.9	1.2	0.6	0.7		
CКСH 3	隅丸方形	-	隅丸方形	9.6	-	0.8	1.2	0.2	0.5	北東溝テラス	
CКСH 4	隅丸方形	全周 (1-中央か)	隅丸方形	7.7	6.6	1.2	1.8	0.3	0.5		
CКСH 5	隅丸方形	-	長方形	6.7	-	1.0	1.1	0.5	0.6		
CКСH 6	隅丸方形	-	方形	9.9	-	1.1	1.8	0.1	0.8		



第287図 元宿遺跡の周溝墓と周溝

討の中でも有効性を確認しているのので、そちらを参照願いたい。

本遺跡の周溝墓、周溝について双方の目安と対照する。

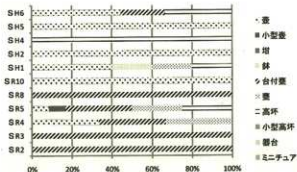
まず、方形周溝墓である。C区の方形周溝墓群としたものは、4号以外は調査区域外にかかっており、確実ではないので再度確認したい。なお、以下では断わりのない場合本報告の周溝墓を指している。

全体、外周の平面形は隅丸方形である。周溝が全周するものは第4号で、南西溝の中央が浅くなるものの、その可能性が高い。一隅切れのものは第1・2号で、第2号周溝もその可能性がある。周溝区画内が直線的な辺をもつものは第1・3・4・5・6号、第2・3号周溝である。(目安①・②)

周溝内の施設としては、第4号の南東溝が中央に段を持って深くなり、南隅寄りには陸橋部に浅くなっている。第6号は北東溝に溝内土壌が2箇所造られ、その第1号土壌は、リン・カルシウム分析の結果、埋葬施設の可能性が高いことが指摘されている。(後述) (目安③)

周溝の規模が幅1m以上、深さ50cm以上のものは、第1～6号、1・3～5号周溝が当る。第2・7号もそれに近い規模である。周溝としたものも概して幅広の傾向がある。(目安④)

器種構成で壺あるいはそれに加えて小型壺の出土比率が高く、半ばを占めるものは、第1・2・



第289図 器種構成

5・6号である。(目安⑤)

第1・2号周溝墓の壺は焼成後の底部穿孔が施されている。

遺物の遺存率は、第1号の壺、鉢、第2号の壺が完形に近い。(目安⑥)

出土位置は、第1号の西隅の周溝底と南隅の下層から、第2号の北西溝西隅寄りの中層から壺が出土している。(目安⑦) 第5・7・8・9号周溝では破片がまとまって出土している。

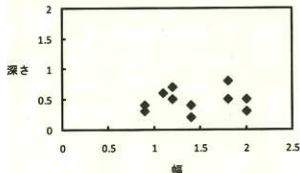
群構成については、C区の周溝墓は東西2箇所に分けられ、一定の間隔を置いて造られている。(目安⑧)

以上の目安との照合の結果、平面形態、方台部の各辺の状況、開口部のない全周する周溝、周溝の規模、出土遺物の器種、出土状況、群構成の複数の目安と合致する第1～6号周溝墓は、墓として確実なものと考えられる。

次に周溝としたA区の周溝について、建物跡・住居跡の目安と照合しながら確認する。以下では断わりのない場合本報告の周溝を指している。

平面形態で不整な方形を呈するもの、不規則な開口部を持つものは、第5・7・8・10・11号である。逆に第2・3号は整った平面形である。第3号は一辺の中央が切れるものである。(目安①)

第1・4・6・9号も同様の可能性があるが、部分的なものであるため断然としない。



第288図 周溝の幅と深さ

周溝区画内の規模は、一辺8m前後の第8・10号と9～10mの第2・5・7号、11～12mの第3・4・12号の三者がある。(目安②)

器種構成では、前述のように壺・小型壺がほとんど出土していないのが特徴的である。逆に台付甕・甕の出土比率が高い(目安③)。

周溝の規模(第288図)が、幅1m以上で深さ50cm以下のものは、第2・6・7・9号である。幅1m以下で、深さが50cm以下のものは、第8・10・11号である。幅1m以下で深さが50cm以上あるものは認められない。(目安④)

遺構の重複については、直接の切り合い関係にあるものはない。第4号と第6号は入れ子状になっている。

以上、平面形態、規模、器種構成、周溝の規模から、A区の周溝を「周溝を有する建物跡」とする。ただし、部分的な第1・4・9号は別の性格を持つ可能性も考慮すべきであろう。

また規模には3通りあり、建物の規模を反映するものと考えられる。

(3) 方形周溝墓の群構成について

川島町内では、本遺跡が方形周溝墓が確認された初めての例であるため、その様相について若干みておきたい。方形周溝墓は、上述のように標高の高いA区から検出されている。調査区が路線幅であることから、第4号以外はいずれも調査区の縁にかかっている。調査区内では、おおまかに東側と西側の二つの群に分かれている。

東群は第1・2号から構成されている。調査区の北西側は崖状に低地に面しており、群は西側に展開するか、B区の様相を勘案すると、第1・2号とそれに加えてもう一基程度の2～3基から構成される可能性が高い。第1・2号とも概して南西側が浅く、東側が深い。また第1号は北側が陸橋部になっている。調査区内では各隅の周辺から遺物が出土し、特に西隅からは底部穿孔壺が出土

しているのが特徴である。隅が土器の配置される箇所として重視されているのが分かる。

西群は第3～6号から構成されている。遺構の分布状況は、調査区の南側に偏っている。第6号の西隅からは壺が出土しており、北西側を意識した土器配置である可能性もある。

調査区内の遺構の分布状況は千鳥状になっており、第4号北西溝外法と第6号北西溝内法、第3号北西溝内法と第5号北西溝外法は並んでいる。しかし、延長線上にある遺構が同一の群とは限らない。調査区外の様相は不明だが、かつて述べたように、千鳥状の分布を見せる場合は隅を合わせて築造される場合が多い(福田2000)。そうすると、この分布状況は二つの群の複合した姿である可能性が高いことになる。

本遺跡と同様の群構成と土器配置が広く認められることは別に述べたとおりである。大宮台地や比企丘陵にも同様の例が認められる。こうした台地の例と本遺跡のような低地の例もほぼ同様の様相を呈することが確認できた。当時の社会状況を知る上で重要な例と考えられる。

(4) 溝中埋葬について

元宿遺跡では、第6号の北東溝から2基の溝内土塊が検出された。そのうちSK1としたものについては、遺構確認時にプランの乱れから存在を予想し、サブトレンチを設けて土層を意識した調査を行うことができた。調査は中層に至るまでは周溝の他の部分と何ら変わる点はなかった。中層でやや粘土ブロックを多く含む土層を検出したが、埋葬施設の埋戻し土と断定できるものではなく、下層も特に注意されるような覆土ではなかった。全体的な堆積状況も自然堆積に近いものであった。全体の掘り下げ後、リン・カルシウム分析を行う目的で断面観察用のベルトから第290図のようにサンプルを採取した。今回はその内の、№1・5・6・8・10・18・22・27について分析を行い、下

層の15層の8・22において、明らかな凝集を認めることができた(第XIV章参照)。この分析結果は、SK1が埋葬施設である可能性を示すものである。

管見に触れる限りでは、こうした自然科学分析によって、方形周溝墓の溝内土壌が埋葬施設として推定されたものは他にはない。土壌等の施設は伴わないが、周溝内にリン酸の集積がみられたものとしては東京都北区豊島馬場遺跡(中根・馬場1995)がある。豊島馬場遺跡も方形周溝墓と周溝持建物跡が混在する遺跡であるが、方形周溝墓と考えられるS H42の周溝にリン酸の凝集がみられる。試料の採取方法及び統計処理の結果に対して筆者は現状では十分な評価ができないが、両例は全国で数多く行われてきたリン・カルシウム分析の最も大きな成果の一つといえるであろう。

方形周溝墓の溝中埋葬については、千葉県市原市草刈貝塚(小林1990)の例がつとに有名である。埋葬施設は2.22×0.65mの長方形の土壌の北側に張り出し部が付くものである。身長約160cmの熟年の男性が、壺に入った0歳児の小児骨とともに埋葬されており、当時男性と小児の関係が古墳時代前期の親族構造を示すものとして注目された。

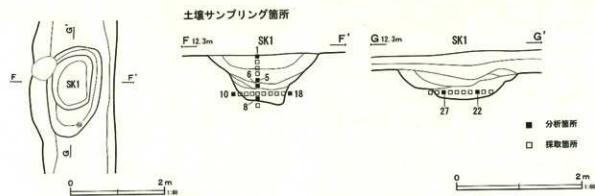
本遺跡の溝内土壌は長軸1.90m、短軸1.10m、溝底から0.1mの深さの不整楕円形で、北寄りの部分が更に1.15×0.80m、深さ0.15mの範囲で一段深く掘り込まれている。分析の結果からは、こ

の一段深い部分が埋葬箇所に相当するものと考えられる。木棺等の痕跡は全く検出されなかったことから、そういった施設は特に設けられず、直葬あるいは布等に包んで埋葬されたのであろう。草刈貝塚の例や大宮台地の中心埋葬施設の規模からすると、この時期の埋葬姿勢は仰臥伸展葬と考えられる。そうであるならば、土壌の規模が成人を埋葬するには小さいことになり、未成年である可能性も考慮に入れなければならない。

方形周溝墓の溝内土壌については別にまとめている(福田1991)。それまで埋葬施設として安定した地位にあった溝内土壌は、実際にはそうと断定できるものはほとんどないことが明らかになった。現在でも基本的にその考えには変わりはない。

だが今回の例のような一見ありふれた土壌が埋葬施設であるならば、更なる意味が必要ということになる。既に検討課題として忘れられてしまったのか、それとも調査のゆとりがない故なのかこの課題に対しての積極的な取り組みは影を潜めてしまった。しかし、こうした土壌が埋葬施設か否かが、その被葬者像のみならず、弥生・古墳時代の家族像、集団像の検討に与える影響は大きい。

このように、今回の成果は方形周溝墓、あるいは弥生・古墳時代の集団構造の研究に大きな影響を与えるものである。この成果を踏まえ、新たな再検討が今後求められていくであろう。



第290図 溝内土壌のサンプリング位置

4. 古墳時代後期から奈良・平安時代における元宿遺跡の変遷過程

元宿遺跡の調査の結果、縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代、中・近世の遺構・遺物を検出した。本節では、古墳時代後期から平安時代までの出土遺物をもとに時期区分をⅠ～Ⅲ期に設定して元宿遺跡の変遷過程について触れたい。

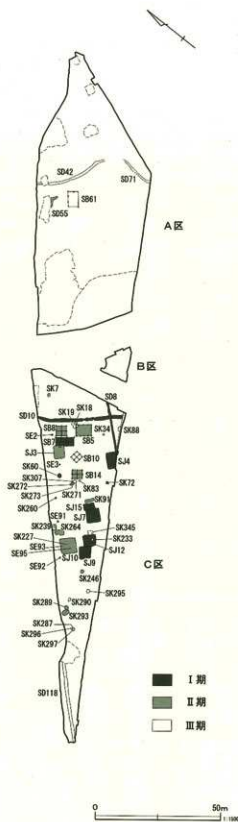
遺跡の立地する自然堤防の標高は13m前後で、西側に位置するC・D区と東のA・B区では最大50cm前後の標高差があり、東のA・B区が低くなっている。竪穴住居跡は標高の高いC区を中心に位置し、標高の低いA区には溝跡や掘立柱建物跡が位置する。

住居跡の主軸方向は6世紀のものが概ねN-37°-45°-W、7世紀以降のものがN-30°-35°-Wとなり、7世紀になりやや東に傾き、以降その傾向が強くなる。

また、元宿遺跡では多くの掘立柱建物跡を検出しているが、遺物の出土量が少なく時期を特定できたものは少数である。切り合い関係及び覆土、近隣の遺構との位置関係から第5・6・7・8・9・10・14・15・56・57・59・60・61・62・63・68・74・80号掘立柱建物跡が古墳時代から奈良時代のものと考えた。

Ⅰ期（6世紀第2四半期）

古墳時代後期の遺構が作られるのは6世紀第1四半期で、第72号土壇出土の須恵器高坏が出土している。脚部は残念ながら残存していないが、おそらく短脚になるものと思われる。深身で口縁内面に沈潜が巡る。TK47段階のものと考えられる。該期の遺構はこれのみで、集落が本格的に展開するのは第2四半期になってからである。古墳時代前期まで墓域であったC区に竪穴住居が建てられ始め、その多くが方形周溝墓の存在しない空地に展開していることから、一部溝が残存していた



第291図 遺構変遷図(1)

可能性がある。

一方、古墳時代後期の墓域は周辺の自然堤防上に変化したと考えられ、近隣では同一形成の自然堤防の対岸に位置する富田後遺跡や周辺の古墳群などがある。

検出した遺構は第4・9・12号住居跡、第60・72・227・246・260号土壌・第8号溝跡が該当し、第3号住居跡との切り合い関係から第7号掘立柱建物跡が、遺構の位置関係から第2・3・93・95号井戸跡が該期に属す可能性がある。

出土遺物は比企型環を主体とする。深身に括れの位置が中位よりも高く、赤彩の範囲が外面全面か中位よりも下まで行われている。口径は12cm前後のものや14cm前後のものがあり、小さいものが古い。14cm前後のものは次期の大型になりだす時期に繋がるものとして第2～第3四半期にかかるものと考えられる。器高は4cm以上である。

第4号住居跡、第60号土壌からは、須恵器環が出土している。口径12.6cmと大型化しだしているため、TK10段階のものと思われる。

甕はやや長胴化しているが、丸みが強く胴部に最大径を持つ。

Ⅱ期（6世紀第3四半期）

この時期は対岸の自然堤防上に位置する孝徳寺古墳や、富士塚古墳など周辺に多くの古墳が築造される。

遺構は標高の高いC区を中心に分布し、第3・10号住居跡、第91・92号井戸跡、第7・91・264・272・273・283・293・307号土壌、第5・8・14号掘立柱建物跡が当該期となる可能性がある。

出土遺物は比企形環と赤彩を施した模倣環がある。それぞれ大型になり、比企型環は口径15cm前後、器高は4cm以上である。深身の環に加えて浅身のものが認められる。模倣環は口径15cm前後で、口縁にかけて開き気味に立ち上がり、器高が低くなる。築道下遺跡第452号住居跡に同種のセ

ット関係の住居跡がある。しかし、比企型環は元宿遺跡出土のものの方が大型化が進んでおり、築道下遺跡のものよりもやや新しい可能性がある。

須恵器は第246号土壌からTK43段階のものと考えられる蓋が出土している。

甕は更に長胴化するが、胴部に最大径を持つ。

Ⅲ期（6世紀第4四半期）

調査区の東側に第42号溝跡が通り、遺構が東側の低地部にも展開するが、住居跡等は存在せず、居住の主体は標高の高い西側であったものと考えられる。

遺構は第10号住居跡、第18・19・34・83・88・233・271・287・295・296・345号土壌、第42号溝跡に第61号掘立柱建物跡と第118号溝跡が該当する可能性がある。

出土遺物は比企型環、模倣環があり、前期に比して一回り大型化する。前者は口径15cmを超え、同様に模倣環も16～18cmを超える大型となる。大型化した比企型環とTK43の新段階の環と蓋がセットで出土している築道下遺跡第457号住居跡に似る。

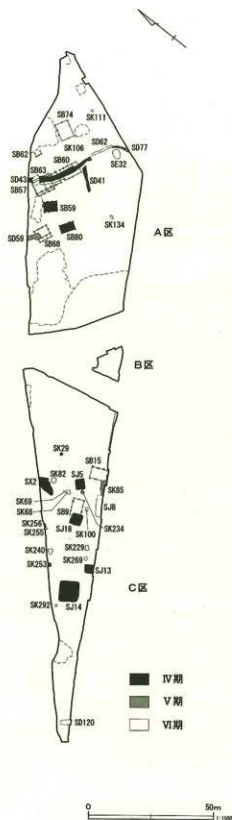
一方、該期の後半になると小型化し、比企型環は口径13cm前後、体部は丸みを持つものと腰を持つものがある。腰は胴部中位あたりにあり、浅身となる。口縁部に沈線を有するものが認められるようになるのも該期からである。

蓋模倣環は口径14cm前後で、口縁にかけて開き気味に立ち上がり、陵がやや弱くなる。身模倣環は口縁が短く、立ち気味である。

須恵器は第42号溝跡よりTK209段階と思われる環が出土している。

Ⅳ期（7世紀第1四半期）

7世紀に入り遺構数は減少していくが、後半になると低地部のA区に掘立柱建物が建てられ始める。



第292図 遺構変遷図(2)

該期の遺構は第5・13・14号住居跡、第89号井戸跡、第29・253・256号土塼、第41・43号溝跡、第2号性格不明遺構で、低地部にも前期に引き続き遺構が展開する。

出土遺物は比企形環が主体で、口径は13cm代のものも含むが、12cmに縮小する。腰の位置は器高の1/2前後である。器高は低くなり4cmを切るものが目立ち始め、外面上部と内面に赤彩を施すものが多くなる。

甕は長胴化し、口縁は開き、口縁に最大径をもつものが出てくる。

V期(7世紀第2四半期)

住居跡は認められないが、この後も遺構は継続して存在するため、調査区外に存在していることが考えられる。

遺構は第85・234号土塼、第59・77号溝跡が該当する。

出土遺物は比企型環を主体とする。口径12cm前後から11cm前後とやや小型となり、器高は3cmを切るものがほとんどで、腰の位置はさらに低くなる。

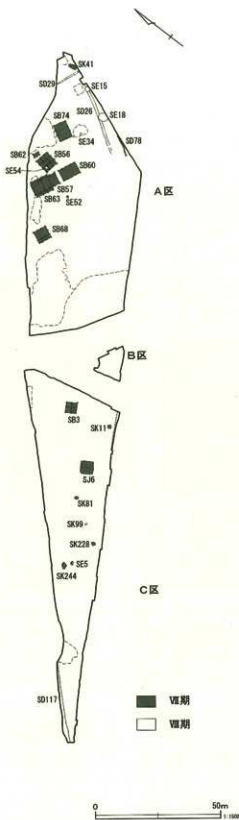
VI期(7世紀第3～第4四半期)

第8号住居跡、第11・41・68・69・82・93・100・106・111・134・217・229・240・252・255・267・292・352号土塼、第32号井戸跡が該当する。他に、第56・57・60・62・63・68・74号掘立柱建物跡の中に該期の遺構が存在する可能性がある。

環は前期に引き続き比企型環を主体とし、僅かに模倣環が認められる。比企型環は小型化し口径10～11cm程度となる。

VII期(奈良時代)

遺構数は減り、第6号住居跡、第81・90・228・244号土塼、第2・5・52号井戸跡、第78号溝跡



第293図 遺構変遷図(3)

が第1四半期で、第41号土壌が第2四半期である。

また、第56・57・60・62・63・68・74号掘立柱建物跡が該期の可能性がある。これらの建物群は重複と位置関係や主軸の方位から三時期の変遷が考えられるが、柱掘形の重複は無く、はっきりとした変化を捉えられない。近隣に第1四半期の須恵器環が出土した第52号井戸跡があるため、少なくとも該期には存在していたものと考えられる。

VII期の遺物は北武蔵型環と皿が本期から認められる。須恵器は第52号井戸跡出土と、第1号溝跡に混入しているものから寄居町末野窯産の無台の環が出土している。口径16cm以上と大きく、底部はやや平底化しているが丸みを残す。熊野遺跡第6号住居跡のものに類例があるため、熊野Ⅱ期新段階に並行するものと思われる。第5号井戸跡出土の南比企窯跡群産の大型壺は、稲荷前遺跡A区第01号井戸跡出土のものに似ており、鳩山編年のI期に並行する。

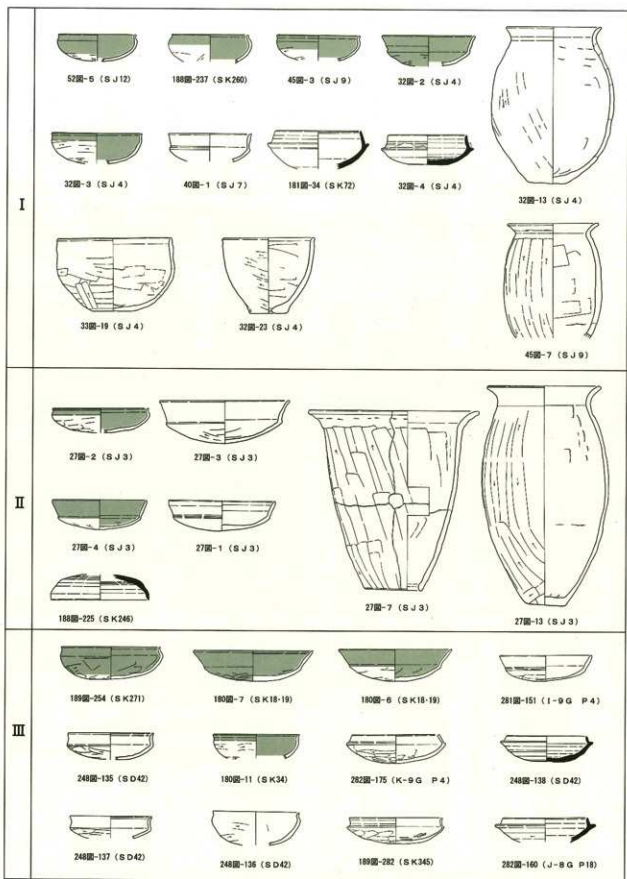
元宿遺跡では該期を境として一時人々がいなくなる。元宿遺跡に限らず7世紀後半から8世紀前半にかけては県内の低地に立地する遺跡の遺構数が減少する傾向があり、元宿遺跡のあり方もこうした流れの中で捉えられよう。

VIII期 (平安時代)

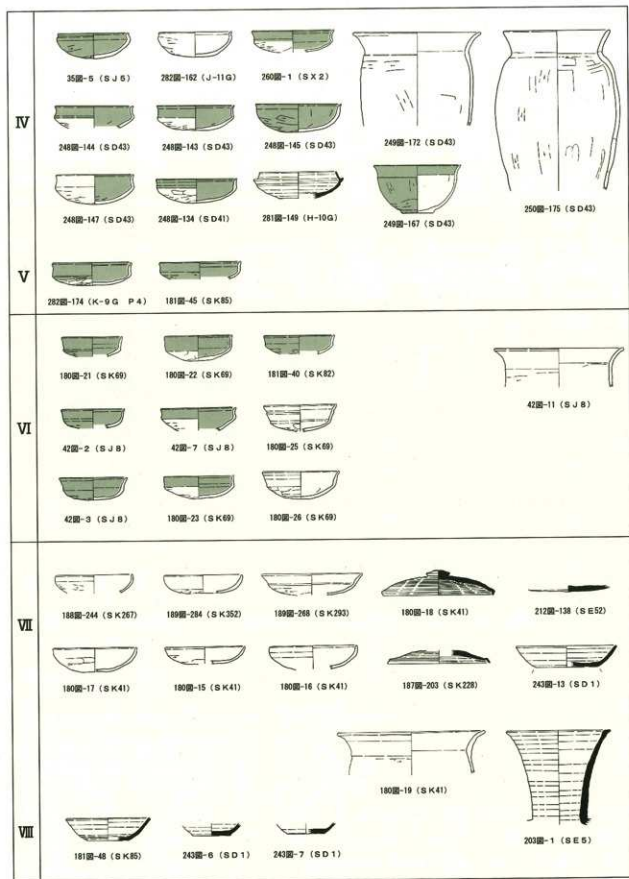
第99号土壌、第18・34・54号井戸跡、第29・117号溝跡や混入と考えられるが第1号溝跡出土の須恵器環の中に該期のものが存在する。

出土遺物は須恵器環で、底径6cm前後、底部の調整は糸切り離し後無調整である。

これ以降では遺構・遺物は認められなくなり、中世に至る。



第294圖 出土遺物編年圖(1)



第295図 出土遺物編年図(2)

5. 元宿遺跡出土の木製品について

元宿遺跡の木製品は、井戸跡・溝跡・不明遺構から出土した。なかでも井戸からの出土が多く、遺物の時期は近世が中心であった。

井戸跡からは桶の側板が多数出土した。桶のほかには下駄・曲物・竪杵などが出土した。溝跡からは、下駄・椀などが、不明遺構からは漆椀が出土した。

ここでは、遺物の中でもまとまった点数が出土している下駄・桶について考察をしていきたい。

(1) 下駄

下駄は、第1号溝跡から差歯下駄の台部が1点、連歯下駄の台部が1点、一木造りの連歯下駄の歯部が2点、第27号井戸跡から連歯下駄が1点、合わせて5点出土している。

下駄の構造は、連歯下駄・差歯下駄の両方が用いられている。

まず第1号溝跡出土の第254図1・2・8、第27号井戸跡出土の第215図3の連歯下駄についてだが、台部の平面形は長方形である。このうち台部の形が分かる第215図3は、台頭より台尻がわずかに狭く、平面形が台形になっている。

第215図3の台部は、角が強く幅が広い17世紀以降の下駄に見られる形状である。楕円形の台部をもつ下駄は出土しなかった。

台部の横断面形は2点とも長方形であり、台裏外周の角を削るものはみられなかった。

前壺の位置は、右寄りの製品と中央の製品がみられる。後壺の位置は後歯の前に作られている。

壺の形状は第215図3の下駄のみ方形である。壺の形状は円形が多い中、少ない例である。

歯の形状については、第215図1・2は台部の幅より歯部の底面の幅が広い台形である。第215図3の歯部は台部と歯部の幅にほとんど差がないが、底面の幅がわずかに広く、これも台形である。

歯部の位置は台頭・台尻に接することなく作ら

れている。

歯部を側面からみた形については、ハの字状に前後へ開くことなく平行に作られている。

第254図1・2の歯部は約5.6cmと高い。第215図3の歯部は3.6cmと低い。

次に、第1号溝で出土した第254図7の差歯下駄についてである。この製品は、差歯下駄のなかでも、台表に歯部のほぞが貫通せず、台裏の横方向のほぞ穴のみで固定する陰卯下駄である。

台部の平面形は長方形で、台頭より台尻がわずかに狭く、平面形が台形になっている。台部の幅は7.7cmと狭く、全体として細長い形状である。

台裏の縦方向に細長い面があり、台部の横断面形は三角形に近い形状である。4.0cmと厚みがあり、高さのある三角形となっている。台裏の台頭・台尻を斜めに落としており、縦方向の断面形は台形となっている。

前壺の位置は、やや左寄りである。後壺の位置は後歯の後に作られている。壺の形状は、円形である。

この製品に伴う歯部は出土していない。しかし台部の形状・幅から考えると、歯部は台部より幅の広い形状と考えられる。

出土した下駄のうち、連歯下駄では17世紀以降にみられる台部が方形で角のしっかりした形状と、近世以降にみられる台部の角がやや丸く幅の狭い形状の二種類がみられた。

差歯下駄は、17世紀以降にみられる横断面三角形の特徴を持つ下駄が用いられていたようである。

(2) 桶

桶は、第30・31・33・41・42・43・49・57・67・69号井戸跡で出土している。

完形品は出土しておらず、側板・底板・箍がそれぞれ出土している。

第69号井戸跡から出土した桶では、井戸杵とし

て使われていたものである。出土状況から、井戸枠に使用されていた可能性が考えられる。

第69号井戸跡からは、桶の側板が26点出土した。細かく折れた状態だが籬も出土している。この側板に伴う底板は出土していない。

側板の高さは53.3cm前後で中形の桶である。側板の枚数がすべてそろっているとは考えにくい。側板の幅を合計した数値からの直径は49.9cmである。出土位置の井戸径約70cmより小さく、桶の両側には約10cmの空間があることとなる。

側板の外面には籬による圧痕が3段みられる。上端から1.3~6.8cmの位置に1段、28.0~36.0cmの位置に1段、46.4~51.2cmの位置に1段、痕跡がみられる。

籬の幅は1.3~1.6cmである。

内面下部には、底板を止めるための窪みを削りこんで作っており、側板上端から約50cmの位置に底板をはめ込んだと考えられる。

第219図81の側板には、桶として使用していた時の痕跡として、円形の孔と木栓が残っている。桶使用時の痕跡がみられることから、井戸枠への転用は確かである。

第218図66・68、第219図78・79、第220図87の側板には、直径0.8cmの孔が穿たれており、中に木釘が残るものが2点ある。持ち手を固定した痕跡の可能性もあるが、孔の位置が一定ではなく目的は特定できない。

第69号井戸跡から出土した桶は、ある程度側板の枚数が揃っているものであり、このほかは枚数がまとまって出土する程度である。

第30号井戸跡からは桶の側板が11点出土しているが、厚さなどから考えて同一の桶ではなく、3個体分あると考えられる。このうち第215図12、第216図16は中形の桶である。第67号井戸跡からは直径約38cmの底板が出土しており、中形の桶で

ある。第42号井戸跡出土の桶の側板は、残存する高さは20.6cmで中形の桶と考えられる。

第31号井戸跡から出土した桶の側板は、高さ15.8cmと小形の桶である。第33号井戸跡出土の桶は高さ16.7cmと小形である。第41号井戸跡出土の桶は高さ15.8cmと小形である。第43号井戸跡出土の桶は高さ19.4cmと小形である。第49号井戸跡からは直径19.0cmの底板が出土しており小形の桶である。第57号井戸跡出土の桶は、高さ16.4cmと小形である。小形の桶は高さ16~19cmが中心であった。

数量としては中形の桶より小形の桶がやや多く出土している。また、小形の桶は1個体分が出土するものもあり、手元で使用する大きさの桶は再利用されず、中には形あるまま捨てられることもあったようである。

中形の桶は井戸枠に再利用したり、解体して再利用したりということが考えられる。古代では曲物は水溜や井戸枠に転用されたが近世でも転用の習慣が続いているようである。

(3) 元宿遺跡の木製品

元宿遺跡は近世の木製品がまとまって出土した数少ない遺跡であり、貴重な資料となった。

今回出土した木製品の器種は下駄・桶・曲物・漆碗など生活に関わる製品が多く、生業に関わる製品はほとんど出土していない。出土遺構が井戸跡に集中しており、出土量がやや少ないということはあるものの、遺跡の性格を考える上では特徴的である。

県内で出土した近世の木製品は資料が少なく、特徴をとらえることが難しい。今後は、元宿遺跡の資料も合わせて、遺跡周辺の地域的な特色をつかむことが課題である。

6. 元宿遺跡の中・近世について

元宿遺跡の調査において、縄文時代・古墳時代・古代の遺構・遺物のほかに、中・近世の遺構・遺物も多数検出された。遺構の内容としては、掘立柱建物跡・柵列跡・井戸跡・土壇・溝跡・性格不明遺構のほか、ピットが挙げられる。これらの遺構・遺物の性格について小考してみたい。まず、掘立柱建物跡から検討していくことにする。

掘立柱建物跡

掘立柱建物跡からの出土遺物は極めて少なく、時期の特定は困難である。ここで中・近世とした掘立柱建物跡は、他遺構との重複関係や、規模・柱穴の並びや覆土などを基として推定したものである。

中・近世と考えた掘立柱建物跡について主軸方位をみると、概ね6つのグループに分かれるといえる(第296図①)。便宜上、これらを西からA～F群と呼称することにする。

A～F群を個別に観察すると、群同士で直行関係をもつものがあることが分かる。これらは、現在の屋敷地でもみられるように、敷地内に複数の建物がある場合(例えば、母屋と納屋・離れなど)、すべての建物が同一の主軸方位を指すのではなく、直行関係をもつ場合がある。各群の中で、直行関係にあるものは、全てとまではいわないものの、この共存関係を示していると考えられる。

この前提で眺めてみると直行関係にあるのは、A群とD群、B群とE群、C群とF群といったように3つのグループが認められる(同図①)。

この3つのグループを念頭に掘立柱建物跡の分布(第297図)をみると、以下の3点に気づく。

- 1 : A・D群は、遺構数は少ないもののA区とC区に分布している。
- 2 : B・E群は、A区にのみ分布しており、C区には認められない。
- 3 : C・F群は、10棟のうち、A区西端部に位置

する1棟(第67号掘立柱建物跡)を除いて、C区に分布している。

さらにこれらのグループについて、細かくみていきたい。

1のA・D群のうち、A群に該当するのは第10(C区 N-81° - W)・79(A区 N-90° - W)号掘立柱建物跡の2棟である。

D群は3棟で、第16(C区 N-3° - W)・18(C区 N-0°)・77(A区 N-3° - E)号掘立柱建物跡が該当する。この3棟については、真北からの振れは最大3度であり、極めて正確な南北棟といえる。

A・D群のうちA区の2棟については、直線距離7mで直行関係にあり、共存していた可能性が考えられる。なお、第77号掘立柱建物跡は第70号掘立柱建物跡(E群)と重複していることから、B・E群のグループとの時期差が想定される。

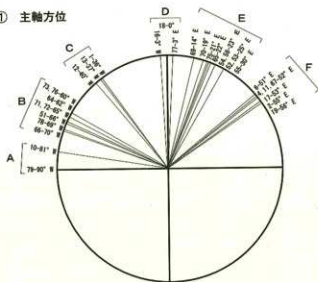
またC区では、第10(A群)・16(D群)号掘立柱建物跡も直線距離7mで直行関係にあり、共存していた可能性が考えられる。

残る第18号掘立柱建物跡(D群)は、調査区内では単独で検出されたものである。調査区北側は1m程で、旧流路に向かって急激に落ち込んでいたため、掘立柱建物が存在した可能性は極めて小さい。先の4棟は、2棟ずつ7mという至近距離にあったのに対し、第18号掘立柱建物跡の南側10mまでの間に掘立柱建物跡は確認されなかった。

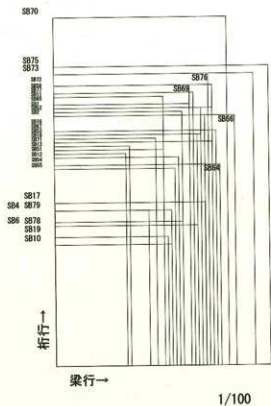
この点について、考えられる可能性は以下の3点である。

- a : 第18号掘立柱建物跡が単独で存在している場合。
- b : 第18号掘立柱建物跡の南側調査区外に存在している場合。
- c : 第18号掘立柱建物跡の周囲に分布しているピット群の中に、掘立柱建物の柱穴が存

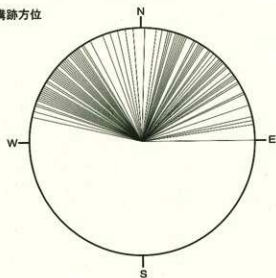
① 主軸方位



② 規模



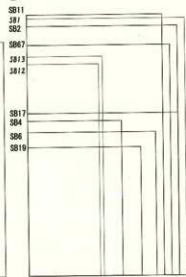
③ 溝跡方位



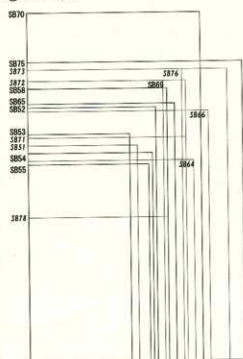
④ A・D群



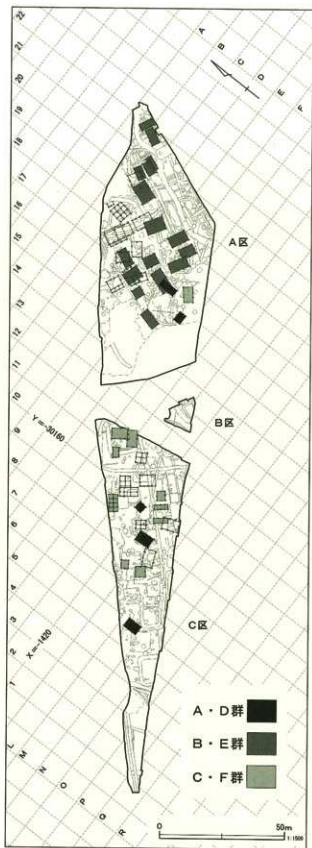
④ C・F群



⑤ B・E群



第296図 掘立柱建物跡の主軸方位・規模と溝跡方位



第297図 掘立柱建物跡分布図

在しているが、建物として特定できなかった場合。

1～3の可能性のどれが該当するかについては特定できなかった。私見としては、bの第18号掘立柱建物跡の南側調査区外に掘立柱建物跡が存在している可能性を考えたい。

2のB・E群のうち、B群は8棟で、第51(N-66° -W)・64(N-62° -W)・66(N-70° -W)・71(N-65° -W)・72(N-65° -W)・73(N-60° -W)・76(N-60° -W)・78(N-69° -W)号掘立柱建物跡が該当する。これらの主軸方位は、N-60° -WからN-70° -Wといったように、最大10度の開きの中でばらつきがある。

E群は9棟で、第52(N-25° -E)・53(N-25° -E)・54(N-23° -E)・55(N-30° -E)・58(N-23° -E)・65(N-22° -E)・69(N-14° -E)・70(N-19° -E)・75(N-21° -E)号掘立柱建物跡が該当する。これらの主軸方位は、N-14° -EからN-25° -Eといったように、最大11度の開きの中でばらつきがある。この点については、B群における主軸方位のばらつきに呼応するかのようであり、このことから、両群の中に共存関係をもつ例が存在する可能性が考えられる。

但し、B群の第71・76号掘立柱建物跡、E群の第53・54号掘立柱建物跡、および第65(E群)・66(B群)号掘立柱建物跡は重複関係にあり、時期差を示している。これらの掘立柱建物跡は比較的まとまった状態で分布しており、この重複した3例もその中に位置している。

3のC・F群のうち、C群は3棟で、第1(N-36° -W)・12(N-40° -W)・13(N-37° -W)号掘立柱建物跡が該当する。3棟の主軸方位の最大幅は4度と比較的近い数値となっている。

F群は7棟で、第2(N-55° -E)・4・11・67(いずれもN-52° -E)・6(N-51° -E)・

17 (N-53° -E)・19 (N-56° -E)・67 (唯一A区 N-52° -E)号掘立柱建物跡が該当する。これらの主軸方位は、N-51° -EからN-56° -Eといったように、最大5度の開きであり、比較的近似値であるといえる。なお、これらの掘立柱建物跡のうち、第17号掘立柱建物跡の北1m、西2.6mの位置に、L字状を呈する第3号柵列跡が存在する。その柱穴列の方位は、N-36° -WとN-54° -Eであり、第17号掘立柱建物跡の主軸方位ときわめて近く、位置関係からみても両者の共存性が高いと考えられる。

第1号柵列跡(A区 N-31° -W C群)と直行に近い主軸方位を指すのは、直線距離で5mの距離にある第67号掘立柱建物跡(N-52° -E)であり、関連性が考えられる。A区には擾乱部分があり、この範囲内に掘立柱建物跡が存在していた可能性は残る。その場合、柵列の方位からみて、C・F群の主軸方位をもつ掘立柱建物跡に共存すると想定される。

また、第2号柵列跡(B区 N-60° -E)近辺では、掘立柱建物跡は検出されていないが、B区は調査範囲が小さいため、調査区外に掘立柱建物跡が存在する可能性がある。その場合第2号柵列跡の方位からみて、C・F群の主軸方位をもつ掘立柱建物跡に共存する可能性が考えられる。

中・近世と推定した32棟の掘立柱建物跡のうち、桁行・梁行の規模が判明している31棟について規模をグラフ化した(同図②)。掘立柱建物跡の規模は大小様々であるが、これは住居としての大小の違いや、住居ではなく納屋や作業場など、用途の違いにも関連すると思われるが特定には至らない。

ついで、この3つに分けたグループについて考えてみたい。全掘立柱建物跡ではなく、グループごとにグラフを抜き出してみた(同図③～⑤)。

この3つのグラフから、2点がみて取れる。

a : A・D群とC・F群を比較すると、数の差はあるが、掘立柱建物としての規模は比較的近い。

b : 前2グループ(A・D群5棟、C・F群10)に対して、B・F群は数が多く(17棟)、掘立柱建物としての規模が大きいものが含まれる。

続いて、これまでに検討した事例と、先に掲載した遺構・遺物の内容を踏まえた検討を行いたいと思う。掘立柱建物の主軸方位に関して、A・D群の掘立柱建物は東西南北を意識しており、微地形による制約を受けていない。これに対してB・E群とC・F群の掘立柱建物の主軸方位は、東西南北を意識していない掘立柱建物である。

近世の遺物は、B・C区からも出土しているが、量的には、圧倒的にA区からの出土である。このことから、1 : 調査区内に限れば、近世段階では調査区東端部の東側を、南北に通過する街道に面したA区が、掘立柱建物の密集度の高い区域であったという可能性。2 : A区は、C区に比べ標高が低く、地下水位が高いため、掘立柱建物耐久年数が短く建て替えの回数が多くなったという可能性の2点が考えられる。

なお私見として、出土した近世の器や道具類を使用したであろう人々が住んだのが、多くはA区に位置する掘立柱建物ではないかと考えられる。つまり、掘立柱建物の主軸方位からB・E群とした掘立柱建物が該当する。

以上に、掘立柱建物跡の主軸方位を基に3つのグループを設定して少し考えてみたが、なぜ3つのグループが生じたかについて検討したい。

① これらは、時期差があるのか否か。重複する例もあることから、部分的には時期差があるが、2つないし3つのグループの中の、何棟かの掘立柱建物が共存し、変遷を重ねたという可能性。

② 3つのグループに時期差がある場合、5棟のみのA・D群が最も古いグループである可能性が高い。これに対して建物数が最も多く、規模的にも大型の掘立柱建物が含まれるB・Eが最も新しく、両者の中間にC・F群があったという可能性。しかし既に述べたように、A区の掘立柱建物

は、建て替えの頻度が高かったとも考えられる。

①については、別の軸方位をもつ掘立柱建物
が共存する要因があったことになる。考えられる
要因としては、a 方角 b 地形による制約、c 人
的要素の3つの要因が考えられる。

a の方角は、東西南北を意識したもので、A・
D群の5棟が該当する。C区北西側の調査区境界
線のラインは、自然堤防の肩部の地形を反映する
ものであり、この線から1m程で急激に落ち込む。
掘立柱建物跡分布図(第297図)にみる最西端の
掘立柱建物跡(第18号掘立柱建物跡)は、地形と
は無関係といえる。

b の地形的制約は、地形に沿って、屋敷地や農
地などが区画されることによるものを意味する。
C区に分布するC・F群の9棟は自然堤防の肩の
ラインに平行または直行しており、地形からの制
約によると推測される。但し、もう一つの可能性
として、A-C区間を通る道(図中の空白部分)
の方角を意識しているとも考えられる。

c の人的要素は、道や水路など、人工の施設に
沿う形で屋敷地や農地などが区画されることを意
味する。もっとも、道や水路は共に、地形に左右
されて造られることが多いものであり、やはり地
形が制約する頻度が高いと考えられる。

A区東側の調査区境界線は、現在県道となっ
ている、南北に走る道に沿うものである。A区にの
み分布しているA・D群の16棟は、この道の方角
に平行もしくは直行しており、この道を意識して
いる可能性が考えられる。

①については、当初、1:数は少ないものの
A・D群の掘立柱建物がA-C区間を通過する道
をまたがって集落を構成し、次いで棟数が増した
掘立柱建物(C・F群)が、同じくA-C区にまた
がって展開する。次にさらに棟数を増した掘立
柱建物(B・E群)が、A区にのみ展開してい
ったという可能性。2:C・F群とB・E群の何棟
ずつかは共存し、それぞれ別な制約(前者は地形

と道、後者は前者とは別個の道)から軸方位が
生じたとの可能性。

具体的根拠はないが、私見として2の可能性が
より高いと思われる。

溝跡

古墳時代または古代と特定できない溝跡を、基
本的に中・近世のものとしみなした。全体的な傾向
として、A区の第1号溝跡が蛇行する他は、規模
の大小があるものの概ね直線状を呈している。掘
立柱建物跡との位置関係や方位に関して検討する。

溝跡の方位(第296図)をみると、かなりの
ばらつきがみられるものの、掘立柱建物跡のB・
C・E・F群の方位に近い数値付近では、溝跡が
密集していることがわかる。

A区では、B・E群の掘立柱建物跡に、C区で
はC・F群の掘立柱建物跡に平行または直行する
溝跡が多くみられるが、溝跡と掘立柱建物跡が重
複する例があり、新旧関係は不明ながら時期差が
あることが分かる。しかし、共存関係にある掘立
柱建物跡と溝跡の具体例を示すことは困難である。

これら多数の溝跡の性格について検討する。想
定される溝の性格は、概ね以下の4点である。

- 1: 用排水路としての溝。
- 2: 屋敷地や、集落内を部分的に区画するた
めの区画溝。
- 3: 樹木などの根を掃うための根切り溝。
- 4: 地下水の高い地域で行われることがある、
地中の水抜のための溝。

1については、規模的に大きく蛇行する第1号
溝跡にその可能性が考えられる。

2については、掘立柱建物跡と平行または直行
する溝跡の多くが該当すると推定される。その中
には1つの屋敷地のみを区画する溝と、複数の屋
敷地などをブロック状に区画する溝が存在する
と思われる。後者の1例として、C区の第7号溝跡
を考えたい。

3については、調査区には樹木の根による地山

の乱れが認められなかったため、可能性は極めて低いと思われる。

4については、区画溝兼用で掘削される場合もあったのではないと思われる。雨天時には雨水がたまるであろうから、溝を排水路に連結すれば排水路の機能も果たすことになる。規模の大きな溝跡に、直行するように重複する小規模な溝跡で、同時期の溝跡同士であれば、以上のような関連性をもった可能性が想定される。

元宿遺跡の溝跡は、具体的な遺構番号を示すことはできないが、1・2・4の機能を果たした溝跡が多数を占めると推定される。

井戸跡

次いで、井戸跡について小考する。井戸跡と判断したものは90基に及ぶ。しかし、遺跡が自然堤防上に立地していることから崩落の恐れがあり、完掘に至らなかったものが多く、検討できる項目が少ない。規模については随くまでも、調査時点での規模からではあるが、1つの傾向として3つのタイプがあるといえる。

- 1：平面径が1m前後で、確認面からの深さが1～2m前後のもの。
- 2：平面径が1.5m前後～2m前後で、確認面からの深さが1～2m前後のもの。
- 3：2以上の規模をもつもの。

タイプ別の数は、1が35基、2は47基、3は10基であった。井戸として機能している期間内に壁面が崩落をし、口径が大きくなっている可能性は十分に考えられる。さらに、機能した期間の長短にも、影響の度合いが異なるものと推定される。

他遺構との重複関係から古墳時代後期と推定される井戸跡は7基（第3・32・89・91～93・95号井戸跡）の内、第32号井戸跡を除いて1のタイプである。第32号井戸跡の開口部は、崩落によりロート状を呈している可能性があり、井戸川部分のみを取り上げれば1のタイプといえる。

奈良時代の井戸跡（第5・52号井戸跡）では、

前者が2、後者が1のタイプである。平安時代については（第18・34号井戸跡）、前者が3、後者が1のタイプとなっている。

出土遺物から、中・近世（近代1基を含む）と思われる（第15～17・19・20・22・27・29～31・33・36・37・39・41・43～46・48・49・51・54・55・57・59・61～64・67・69・70・72・74・80・85号井戸跡38基の内、1のタイプは8基、2は23基、3は7基であった。時期ごとの数が異なるため、一概には言えぬものの、中・近世には大型化しており、井戸に求められる水量の違いが一要因とも考えられる。

性格不明遺構

遺構としての性格を推定できると考えられ、共通性をもつ第1・3号性格不明遺構について考えてみたい。両者とも長目な大規模土壇状であり、断面形は概ね逆台形である。どちらも埋め戻されており、覆土中から陶磁器をはじめとして、多数の遺物が出土している。そしてそれらの遺物は、有機物や炭化物等とともに一括廃棄されていると考えられる。特に後者では、土壁中の縦竹または横竹と思われる竹材に被熱のため赤色化粘土ブロックが付着した状態のものや、炭の塊などが出土している。これらの点から、この2基の性格不明遺構はゴミ穴として掘削され、一括廃棄後に埋め戻されたと推定される。後者では火災で出たごみの廃棄場所として掘削されたと考えられる。

第2号性格不明遺構については、古墳時代後期の土壇か溝跡、もしくは両者が重複した遺構であると考えられる。第4号性格不明遺構は、一部を埋め戻された溝跡といえるかもしれない。第5号性格不明遺構は湧水が激しく、土層断面を凶化することができなかったため、遺構としての性格を特定できなかったため、性格不明遺構と命名した。しかし、調査時の所見として重複した土壇であると考えられる。第6号性格不明遺構についても、遺構としての性格を特定できなかったため、性格

不明遺構と命名した。しかし、調査時の所見として重複した土域であると考えられる。

近世遺物について

近世陶磁器の出土頻度をみると、具体的数値は掲げられないが、最も点数が多いのが瀬戸・美濃系であり、僅差で肥前系がこれに続く。ついで京・信楽系、堺系または備前系、そしてその他の産地というのが整理過程での印象である。

近世の開始前後の陶器としては、瀬戸・美濃系の志野皿（志野織部の碗・皿）と、小破片のため図化に至らなかったが、肥前系の絵唐津（椿文か）の向付と思われる小破片が出土している。前者で実測できたのは14点であり、この他にも図化に及ばなかった小破片が、数十点出土している。しかし後者については、確認できたのは1点のみであった。志野皿で文様をもつものは、いずれも口縁内面に一重圏線、見込に蘭竹文と二重圏線が描かれているものである。17世紀代の陶磁器は少数であり、18世紀中頃より増加傾向を示す。

近世の元宿遺跡の一面

元宿遺跡の調査において、餌猪口2点（第280図126・127）と、小破片のため図化には至らなかったが、煙硝播鉢と思われるものが1点検出されている。また、紅皿も1点（第280図128）検出されている。因みに、これらの餌猪口と紅皿は同一グリッド（F-19G）からの出土である。

餌猪口は18世紀代と推定されるものであるが、煙硝播鉢は17世紀後葉～18世紀前葉と考えられるものである。紅皿（18世紀か）はその名称とおり、紅を入れるための小皿である。江戸時代に「紅一匁、金一匁」と例えられるほどに高価であったといわれ、この小さな容器に少量の紅を入れ販売されたといわれるものである。

出土例はきわめて少ないものの、小鳥を飼育するための道具や、紅を入れるための器、さらには焼塩壺などの存在から、ある程度の富裕層の存在を彷彿とさせる。地理的に川越に近いのも、その一因であろうか。

引用・参考文献

- 秋田裕毅 2002年『下駄』法政大学出版局
石野真一 1997年『桶・樽』法政大学出版局
石坂敏郎 2000『稲荷台遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第239集
江戸遺跡研究会編 2000年『江戸文化の考古学』吉川弘文館
及川良彦 2005年『千代田区外神田四丁目遺跡出土木器ノート—下駄 その1—』『研究論集』XXI 東京都埋蔵文化財センター
書上元博 1994『稲荷台遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第139集
金子直行 2004『芝沼堤外遺跡』川島町遺跡発掘調査報告書第2集
川島町 2005『川島町史』資料編 地質・考古
川島町 2007『川島町史』通史編 上巻
栗岡 潤 2007『白井沼遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査報告書第328集
小林清隆 1990『市原市草刈貝塚』千葉県文化財センター調査報告第171集
中根秀二・馬場健司 1995『周溝内における埋葬位置について』『豊島馬場遺跡』北区埋蔵文化財調査報告16集 北区教育委員会
奈良文化財研究所 1985年『木器集成図録 近畿古代編』奈良文化財研究所
日本考古学協会新潟大会実行委員会 1993『東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会
福田 聖 1991『溝中土壘小考』『研究紀要』第8号（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
福田 聖 2000『方形周溝墓の再発見』同成社
福田 聖 2007『Vまとめ 3. 古墳時代』『久台遺跡Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第339集
福田 聖 2009『反町遺跡Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第361集
宮井英一他 2009『東野／平沼—丁田』埼玉県埋蔵文化財調査報告書第360集
本村充保 2006年『遺跡出土下駄の全国集成に基づく編年および地域性の抽出に関する基礎的研究』『橿原考古学研究』所紀要 考古学論功 第29冊 奈良県立橿原考古学研究所
若松良一他 2000『堂地遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査報告書第266集